

か、洗ひ、洗ひて、止まず、盡きす。

我は目を開きぬ。岩の色目に満ちて目は白妙。岩の色か、色の岩か、練りに練りて、盡きす、碎けす。明神の大瀧とはこれよ。

鶴鶴は此方に来りぬ、また彼方に飛びて、下り行けば、附きつ、離れつ、我も歩むに、また元の道に出でたり。

更に西して笠置に向ひぬ。道狭けれと峻しからず、尾花處々垣をなすに、刈萱、龍膽、藤袴、男郎花、澤枯樹、吾木香、麒麟草、撫子さへ尙残りつ、色は様々岡に點じて、白き石また見す、水の聲また聞こえず。半里、一里、小村過ぐれば、また河のほとりに出でたり。草花はまた少なく、水の音また高し。石漸多くなりて、道も漸急となり、上り、上りて断崖の上に至れば、此方は絶壁、彼方は峻山、水の行衛縦に長く、汀に蔭色となりたる柴の幾重、柴舟は皆出でしか、渡舟ひとつ待つ。

我は南に渡りて山に登りぬ、石はいよ／＼多くなりぬ、岩はいよ／＼大きくなりぬ、笠置となり、薬師となり、彌勒となり、虚空藏となり、文珠となり、天人の刀の痕と

なり、廻相の冠の臺となり、忠臣の判となり、つはもの、貝となり、勇僧の磔となり、吟客の机となりぬ。

水はいかに。

我は岩の上に立つて見下しぬ、聲は聞こえねと長く長く、夕日長く光さして、此處も神の流なりけり。

京のさまざま

京の花の魁は御苑の梅である。また寒い夕方残照も早く愛宕に消えて、星は東に二、三と顔ふ頭、三、四と數えて廻ると紫の振袖着た兒が短冊でも持つて來相な。北野、舟岡には此氣品が無い。

櫻は祇園の大木が魁けるが、餘りに町に近いので紅塵萬丈も形容詞で無くなる。いかに衆と共に楽しむ聖人でも實際口を閉ぢるであらう。智恩院の前にも路を挟んで咲

くが、昔程淺黄の日傘、銀扇で赤い袴をあほぐ人もないから映對の美が無くなつた。清水も塵は立つが、また山の空氣に消されて、奥の院から、石段を見下し、更に向の舞臺が墨畫の様になる暮色を見ると、いかにも古都の春である。鹿ヶ谷の安樂寺、鈴虫松虫の塚のあたりの一株は眞に生の興を知らなかつた尼の靈のあこがれの様な。百萬遍のも大いが、餘り美を構はぬ寺の隅、松が崎のも遠いが眺望も好いので大黒天殿より訪ふ甲斐がある。花の寺は尤遠いがむれて行かぬ一人二人は寂好の法師にも叱られまい。大澤の池のまはりには小袖幕でも並べたら面白からう。嵐山には更に藝術の三舟を浮べたいと思ひながら今に果さぬ。御室は被衣着た人に似あはしいが、ペイル着た人も遂に見なかつた。平野は春の衰頹である。

月の出は三本木の水樓から見ると三十六峰が魂を吐く様な。中空に昇つた頃は巨掠の池、長堤を行くと、一方は銀の光、一方は青い霧、生死の中を行く様な。入方は渡月橋から、更に跡を追うて山路をたどると、陰になり、光になり、生即死、死即生の様である。

紅葉は高尾の地藏院が第一、しかし例の俗塵には文覺でも呼び度なるが、先々明恵に任せて置くか。嵯峨は春程人も行かず、殊に小倉山は秋の隠家であるから、紅葉も其衰の色と見て哀である。東では歌の中山の清閑寺、御陵のあたりのは清くてさびしい、曼珠院の前、鷲の森の外、林丘寺、赤山など赤い色を見つけては、常には知らぬ宮寺を見出すのも興がある。小原は嵯峨にも堪えぬ秋の隠家、寂山が黄になり、茶になり、朽葉になつて散る中を通り越すと三千院にはまだ飾落とさぬ紅の色々、音無の瀧に音を洩らすのは何の溜息であらう。寂光院の汀の櫻は春の思出も無さ相な。雪はまた三本木である。降りしきる頃は向の柳も見えぬが、やう／＼止んで、斜にさす夕日の光に、山々は春よりも一面の花盛、それも春より早くちると、寺の屋根、塔の上丈白く残る、日も其上に紅をさして――

庭は桂の御所が遠州一代の大作文に池と山と亭の配合、全く自然を遮断して、十分に藝術を恣にした所、自然其儘の藝術とした大徳寺の庭と好對照である。修學院は下に自然を眺め中に技巧を用ゐて、天人の調和を計つてある。金閣は夕佳亭に木の間

をさす夕陽を賞する丈佳いが、其外は銀閣に水上を行く東山の趣を味ふに及ばぬ。法然院の山門に立て、内に普善樹、外に落椿を見下すのも興がある。詩仙堂は入口から見上げた所いかに高士の隠家らしい、しかし内は洒脱の趣きがないのは舊體の儘で無い爲か。西翁院は西の方が見え過ぎるが、反古菴へ入つて、小窓から淀を見ると一碗がすゝれる。光悦寺は甚しく荒れたが、方丈の座敷から、斜に延びた松二三の向に斜に垂れた山を見ると、忽主人に逢ふ様な。

祭は葵祭が一である。これを見るのに尤好い所が三ある。一は宜秋門を出て廣小路へかゝるのを梨本神社の前あたりから見ると平安朝が。復活して来る様な。一は下鴨の鳥居前で見ると糺の森が無韻の詩をつらなる様な。一は磯から長堤を上加茂へ行くのを見ると、土佐の書卷を廣げる様な。大徳寺の方丈から見たら如何かとも思つたが、餘り迂遠過ぎて、色も空になつてはと見合はせた。

祇園祭は京の夏の錦である、しかし夜の錦の宵山が尤趣がある。京の町に閉ざれる昔の美術も今の美人も此夜丈外から覗く事を免される様な。

磯の納涼は昔の浮世書を見ると、板橋を掛けた中に、屋根無し芝居、能、動物の見世物、居合抜、皿まはし、讀賣、大弓、田樂、團子、心太、煙草など種々の店が出てゐるが、今は橋も鐵になり、磯も水が殖て狭くなつて、一二見世物も無いではないが、多く京極へ移り、流に足つけて涼む床几も少なく、其代りに川端の樓々に床を出した、しかしこれも欄を並べるから、川幅を狭くするばかり、格別涼風も覺えぬ。糺の森は一層淋しくなつたが、其割に網を釣つて詩を讀む人も見えぬ。清瀨に一夏を過ごした事があつたが、日かげは頭の上高く早く過ぎるが、それ丈狭くて嵯峨までも出度なつた。村の子は大覺寺までも山を越えて踊りに行く。

茸狩は四方の山を庭にする、其代り吟杖を曳く詩境まで繩を張る。自分は二三度さそはれたが、一も取れず、取らずに松陰に臥して、人の取つて笑ふ聲と、取遠へて松の笑ふ聲を聞きながら半眠つた。

春の彼岸に双林寺から高臺寺前を清水あたりまで行くと、昔の京の人に逢ふ。秋の彼岸に疏水邊から岡崎の公園へ行くと今の京の人に逢ふ。

淺井黙語

京都は千年の間、日本の文學、藝術の搖籃になつてゐた、維新の變動は政事と共に一切を東へ引いて、京都は一時廢墟にならうとしたが、永久の美は更に新しい詩人、藝術家を招いて、古人の捉へぬ所を示すのである。畫家で先づ呼れたのは淺井黙語である。自分が始めて逢うたのは明治三十五年の秋で、氏は時に佛蘭西から歸つて新しい目を以て來た、我等は時に銀峰會を組織して新しい文藝を鼓吹してゐた。そこで氏を東山に迎へて一場の談話を乞うたが、氏は餘り多く語らなかつた、自分は先づ氏が口よりは技の人であると感じたのである。

其歸途共に鴨河の岸を通ると話は劇に及んで、氏は頻に彼地の様子を話す、自分は氏が此道にも趣味がある事を知つて、丁度其冬『大鹽平八郎』を上場するに付て六甲山の場の背景を頼んだ。



淺井 忠

賣 花



浅井忠

沙河



浅井忠

藤娘

それから山に水に氏に逢ふ事は幾度であつたか、氏は愈理屈めいた事は云はなかつたが、此山、此水は段々氏の作品に現れて来た。しかも古人とは全く違つた所を捉へるのである、また、模擬的洋畫家が洋人の着眼にならうて、日本の風景を洋風に見ると違ひ、日本的に捉へるのである。自分は氏が洋畫といふよりは日本畫、新しい技術で描く日本畫の人であると感じたのである。

其後氏の趣味は愈廣くなつて、詩畫に及ぶ、陶器に及ぶ、圖案は愈日本的である、殊に光悦の意匠に似てまた新である。野分の手筈などは千草が亂れた中に猪を走らせた所、翁に見せても手を打つであらう、自分は氏が愈平安的の新藝術家であると感じたのである。

三十七年追々京に寄つてくる詩人と藝術家が東山會を組織し、詩の知らぬ所畫補ひ、畫の知らぬ所音樂が現じて、技術は異つても同じ心の技術が分れた爲不完全になる恨を一致さす爲季毎に『夢見草』を出さうと相談した。自分は先づ『獨體怨』を作ると、氏はそれを描かうとして未成らぬ中に、露西亞との戦争が起つて、東山の夢忽破れた。



淺井 忠

山 嵐

見の夢を自分獨寐ぎめて、三十九年、『寐覺草を』出すにつけて、其書を氏に頼むと、氏は直に胡蝶軍と花賣とを描いた。殊に八幡船の紫の帆、緑の波、舟子が蒼色の肌配に配合した色の奇抜、詩に描かなかつた所である。

四十年の秋岡崎の展覧會へ行くと、氏は少女の圖を出した。しかも貝桶にもたれて愁を含んでゐる。自分は氏が風景から人に及んだのを奇として、つくづく見てゐると、氏は自分を見つけて、此方へと休憩室へ招した一言交へるか交へぬ中茶を命じに幕の陰へ入つたが、どうしてか、また見えなかつた。

あゝこれが最後であつた。

或朝殊に紫の山を見て筆を執うとすると、浪華から問合が来て、氏が無くなられたとは誠かといふ、自分は一驚した、しかし信じなかつた。更に問合はせると、事實であつた。

自分は一身の私情より、尤京の爲めに惜しむのである、京の山、京の水、京の人、そも〜とこまで描かれたであらう、土佐は此姿を描いたのである、尾形は此象徴を

現したのである、圓山は此趣を寫したのである、此色の微妙に至つては更に新しい畫家を要するのである。紫、紅、相解けて永久の美を匂はす平安の氣韻、氏は其筆に捉へ、其人格に收めて、しかも逝つた。此紫は復寫す人もあらう、此紅は復捉へる人もあらう、此氣韻、此色彩、共に收めた此人格、自分が最悲しむのはこれである。京都は千年の間、日本の文學藝術の墓にもなつた、新しい藝術家の墓として、先づ立てられたのは淺井黙語である。我等は今此書を出すに付て特に氏の遺珠を収めるのは、かつて見やうとした夢を實にするばかりで無く、京都とは離れぬ聯想の一と思ふからである。



涼の紙



涼納



# 京

## 京の舞子

與謝野晶子

舞子を嵐山の櫻、高雄の紅葉と同じやうに、目に美しい見物と唯思つて居る私は、舞子は春の終りの五月から秋の初めまで、この時節に見るべきものであると思ふ。冬の日舞子が色の澤山交つた友染を三枚も重ねた姿、決して美術的のものではない。友染は裕か單衣にして著て始めて美しくしいもので、大和大路あたりで立話をして居る舞子などの足や腰にゆるくまつはつた袖や裾は、近くから見ても遠くから見ても美しいものであると私は思ふ。

十五來ぬ。鴛鴦の雄鳥の羽に似たる髪にむすばれ、われは袖振る。



子 舞

東山 宿のあるじにおどされぬ。ひひな盗みてこしやとばかり。  
四山や、毛氈しまてほととぎす待つと侍りぬ。十四と十五。

三尾

大原女の黒い装束は江戸に近いもので、梅が畑の女の姿は京都らしいものではないであらうか。重い荷を頭上にしながら、道を避けてくれた人には、必らず、

『おじやまさまよ。』

と美しい聲で挨拶をする。もんへを穿いた男の子は十二三から煙草入を腰にさして居る。頭はお河童様であるが、街の丁稚のよりは少し後より毛が置いてある。梅の尾の橋の上で、京の人は川の中に漂うて居る辨當がらの折箱を兩眼鏡で覗いて、

『ごんぼが二つ残つてまつせ。お芋もあるで。おすもじが浮いて居るえ。』

などと云ふ男を取巻いて、のんきさうに笑つて居た。この山の寺の上人様はお室の仁

和寺の住職を兼ねて居られるさうで、朝早く所化、小僧、寺男など相當の供をつれて下山され、夕方おかへりになる風情が面白い。楨の尾は水をへだてて見て通るのに、常磐木の中のお寺の白壁がいつまでも新らしくあれと祈られる。楨の尾が友染であるなら、山の高い、溪流の多い、美しい橋のある高雄は、徳川時代に工夫せられて進歩した女の衣装の裾模様、胸模様のやうな優美な趣がある。紅葉屋は何處にあるのかと思つたら、道にむしろを敷いて綿くりをして居るお婆さんが、

『この後の家どすがな。』

と云つて、庄屋の門のやうな家を指さした。

嵯峨

嵯峨の面白味と、嵐山のそれとは別趣のものである。私が嵯峨を美しく思ひ出の繪に書かうとするのに、赤い紅葉も雲のやうな多くの櫻も用はない。櫻は釋迦堂の境

内に二三本彼方此處と別れて植られてあるだけで好い。紅葉は大澤の池の傍の榎の紅葉だけでも好い。秋の野生の草の花は武蔵野の十分一の趣もないが、春の堇 たんぽぽ、げんげの花などのむらむらと咲く景色は武蔵野のそれに百倍して居る。曲線の美しい低い山を澤山目に見るのも嵯峨野である。

嵐山

『京は京やな。團子屋のお爺さんまでが禪の話をおしや。』  
などと時時人の噂に上る花より團子の主の翁は夫の異母の長兄である。この家の八畳の間の床に竹の簀を敷いたのが三間位、厚さ一尺位に積んだ團子でいつばいに花の頃はなつて居る。

『一日に五百圓の團子を食べはる。』  
と兄さんは話して居た。五月になるともう團子は日に三四升よりつかないさうであ

る。

『三軒屋に昨日来やはつたお客さんが、一疋五十銭する鮎を十三圓がんで食べはつたさうや。』

などと團子を包む丹後女が噂するやうになると河鹿が鳴く。兄さんは天龍寺へ遊びに行く時間の出来たのを喜ぶ。法輪寺の山から斜に見る嵐山の景色が私は一番好きである。渡月橋も好きである。頂の並び松も好きである。大悲閣は陰気な山陰であるから嵐山の中のやうな気がしない。岩の間に櫻の頃櫻よりも美しい白い八重の桃が咲いて居るのを保津川の船に乗つた人は知つて居るであらう。

あらし山、名所の橋の初雪に、七人わたる舞衣かな。

保津川の水にそふなる女松山、幹紫にしのものめするも。

あらし山、雨の戸出でて大きな船に人待つ唯一人かな。

下加茂

『向うを通るは藝子か、おやま。』

加茂の瑞垣の傍で子守女の歌つて居る歌はこんなものであつても、その聲の美しいことは、何時までも立つて聞いて居たいやうである。然の聲もここのは特に綺麗なやうである。御手洗川の下流に白い根を出して居る篠竹が若葉を附ける頃の岸にあぶれる水の音も、餘所の水音よりもはるかに美しくいやうに私は覚えて居る。

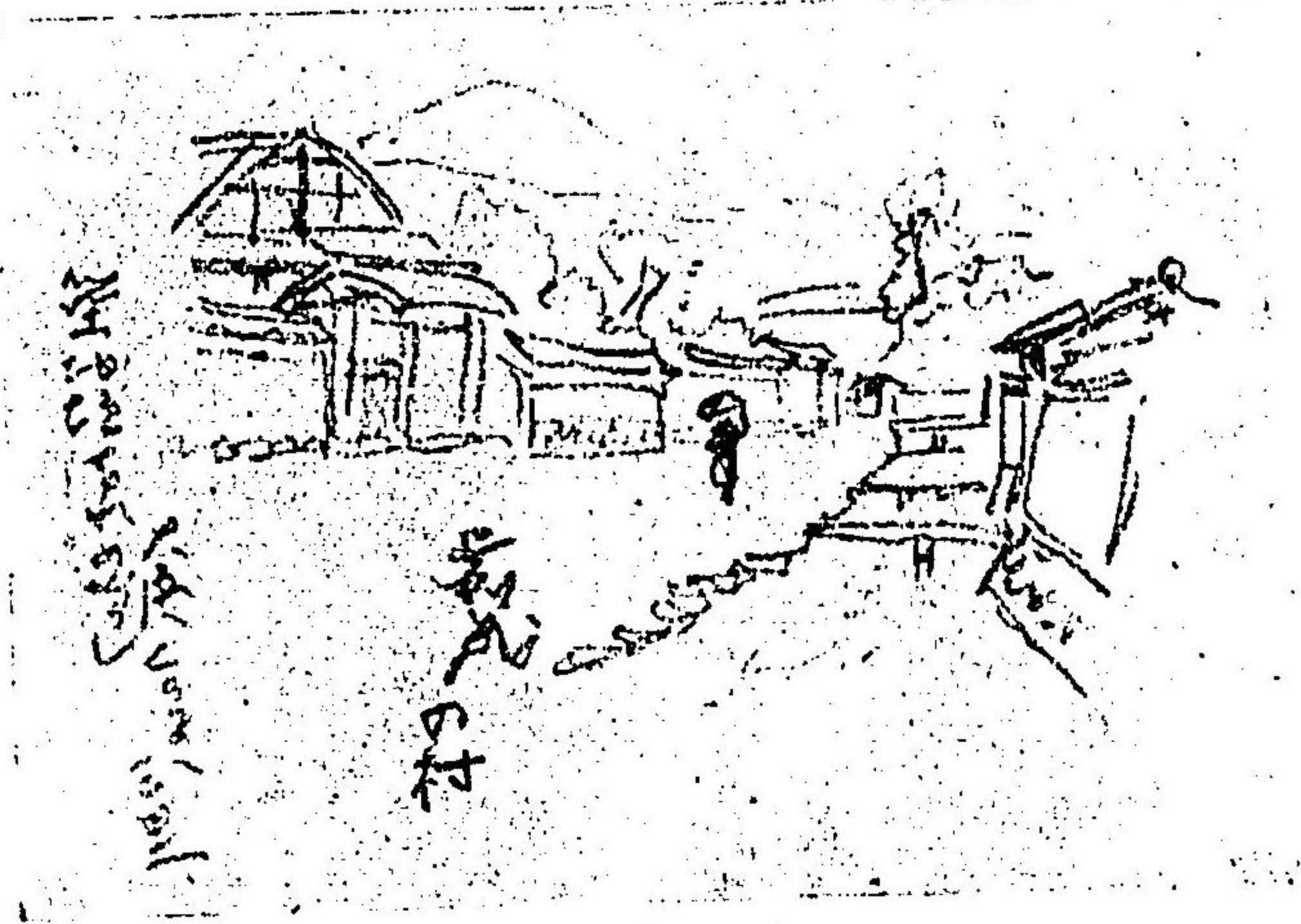
二三騎は木の下かげにはたはたと扇つかへり。下加茂の宮。

上卿はけうらの男、ひげ黒に藤傘するは山しろづかひ。

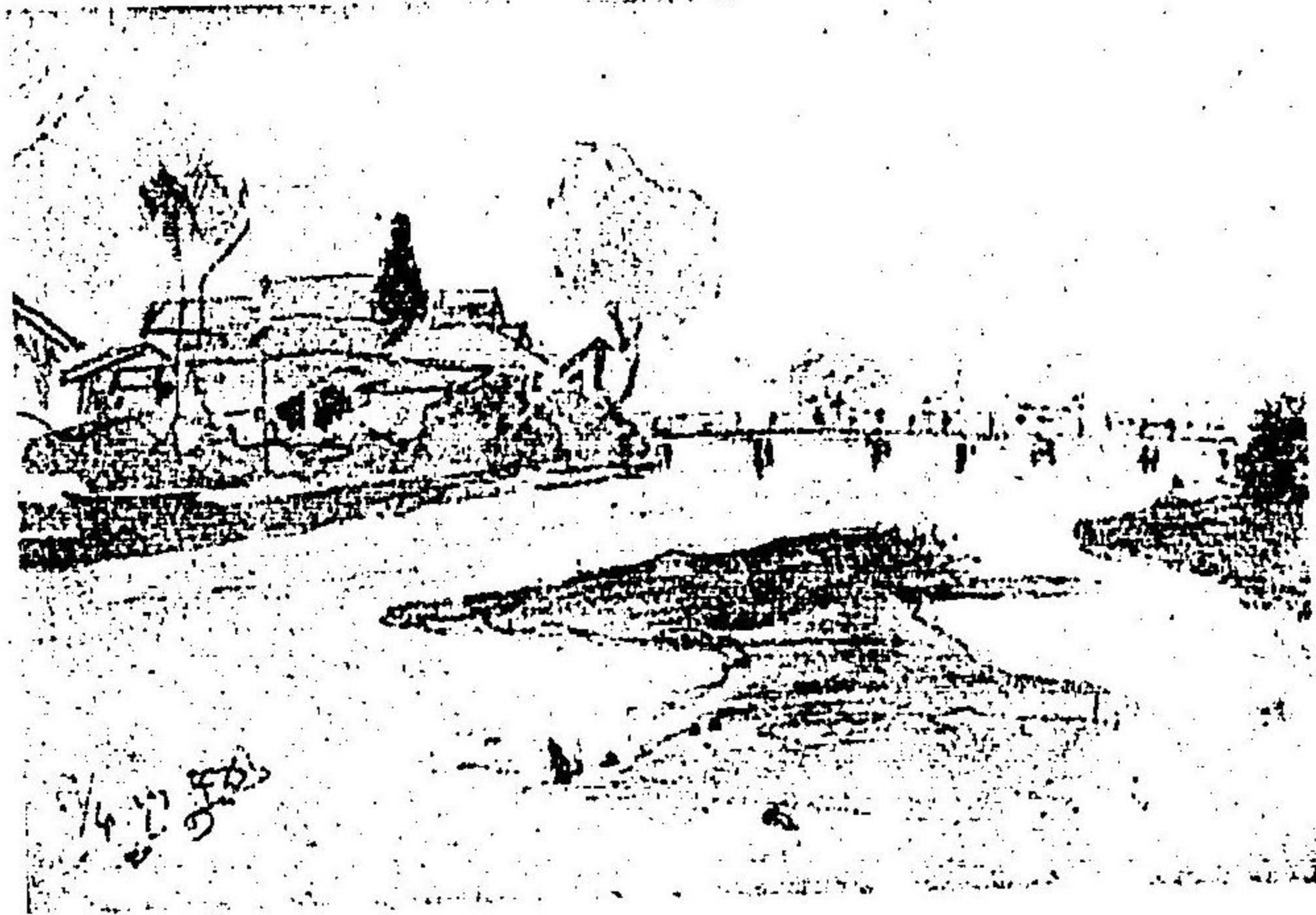
廻廊を西へ並びぬ。騎者達の三十人は赤丹の頬して。

夫がここで詠んだ歌に、

何の木ぞ川よりきたる風に立ち、爵金のひろ葉おほかたは散る。



上加茂



加茂川

清 水

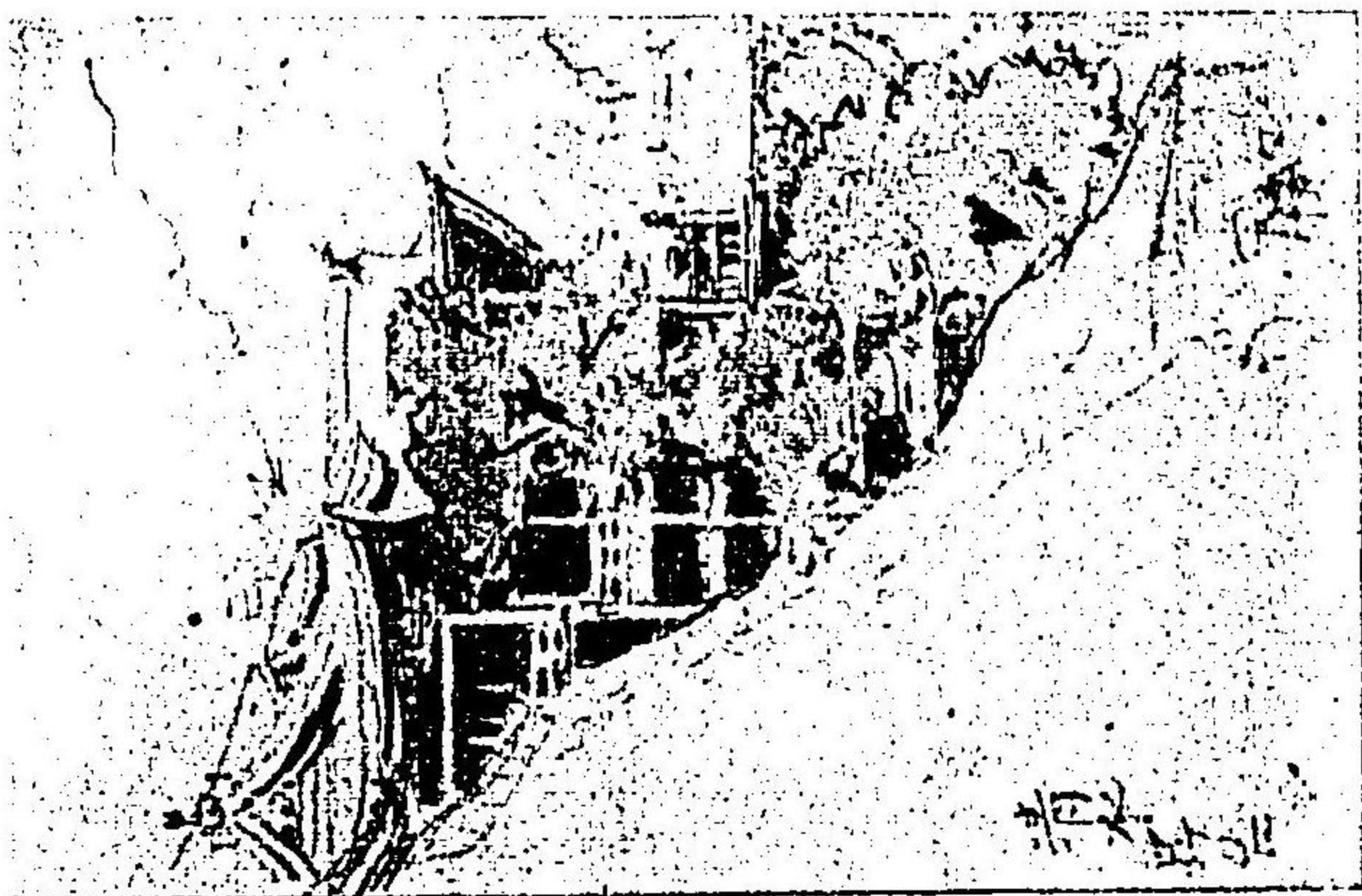
私は清水寺の狭い曲つた阪を上る趣が好きである。初めて京へ来た人と一緒に行く時が中にも嬉しいのである。綺麗な陶器店で買物をしながら、奥の浅い家の後に山の緑の木や、紅葉や、櫻の見える時が嬉しい。繪馬を見るのも好きである。けれど、あの幅のせまい石段を下りるのは氣持の悪い限である。

はなやかに春の灯並ぶ圓山へ。法の灯ともる音羽の山へ。

また夫の歌に、

清水の塔を見上げて舞扇、かろく開けば燕の飛ぶ。

朝はやく清水寺に祈りする、單衣の上の赤き帯かな。



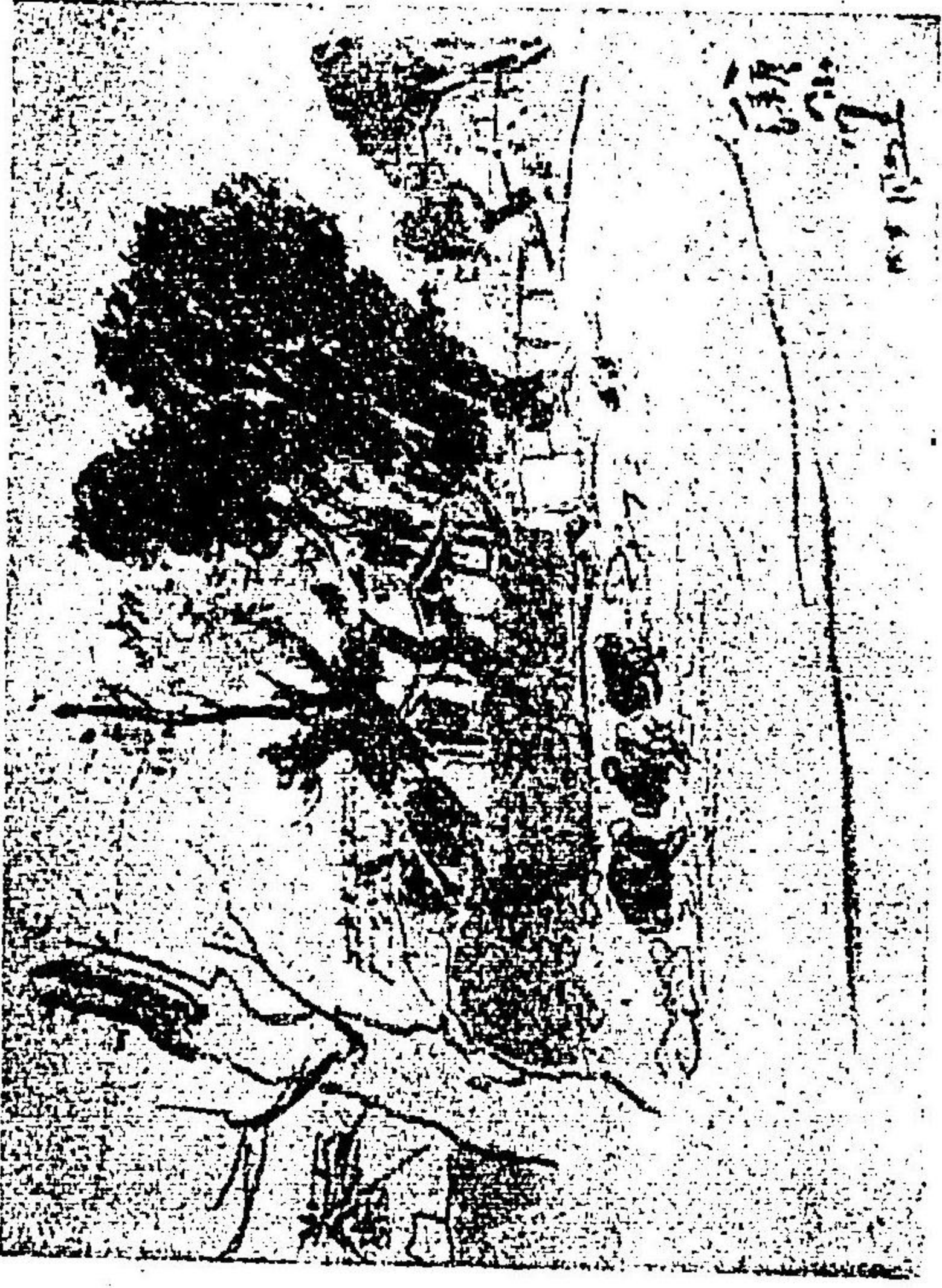
清 水 舞 台



清 水 三 重 塔

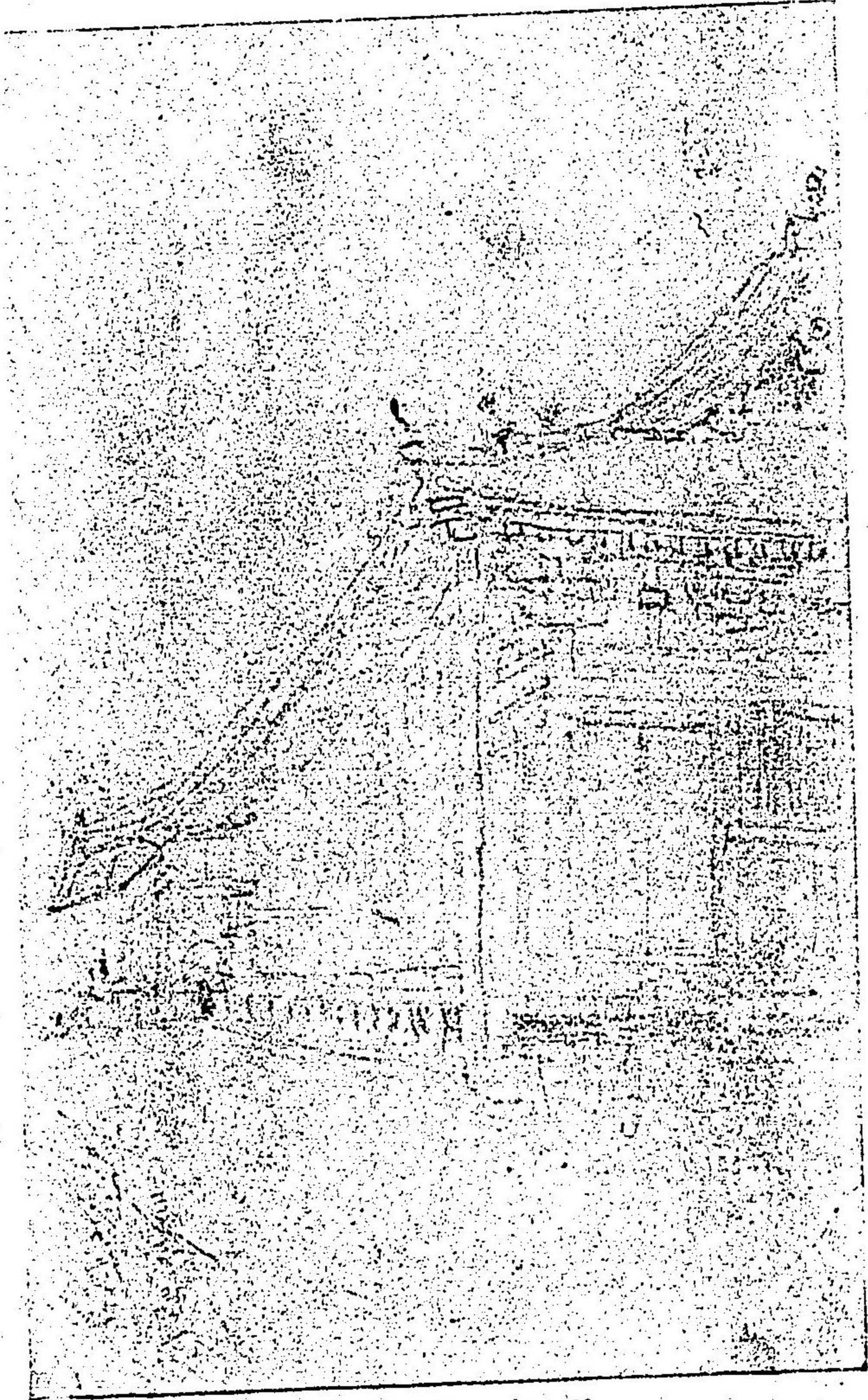


湖 八

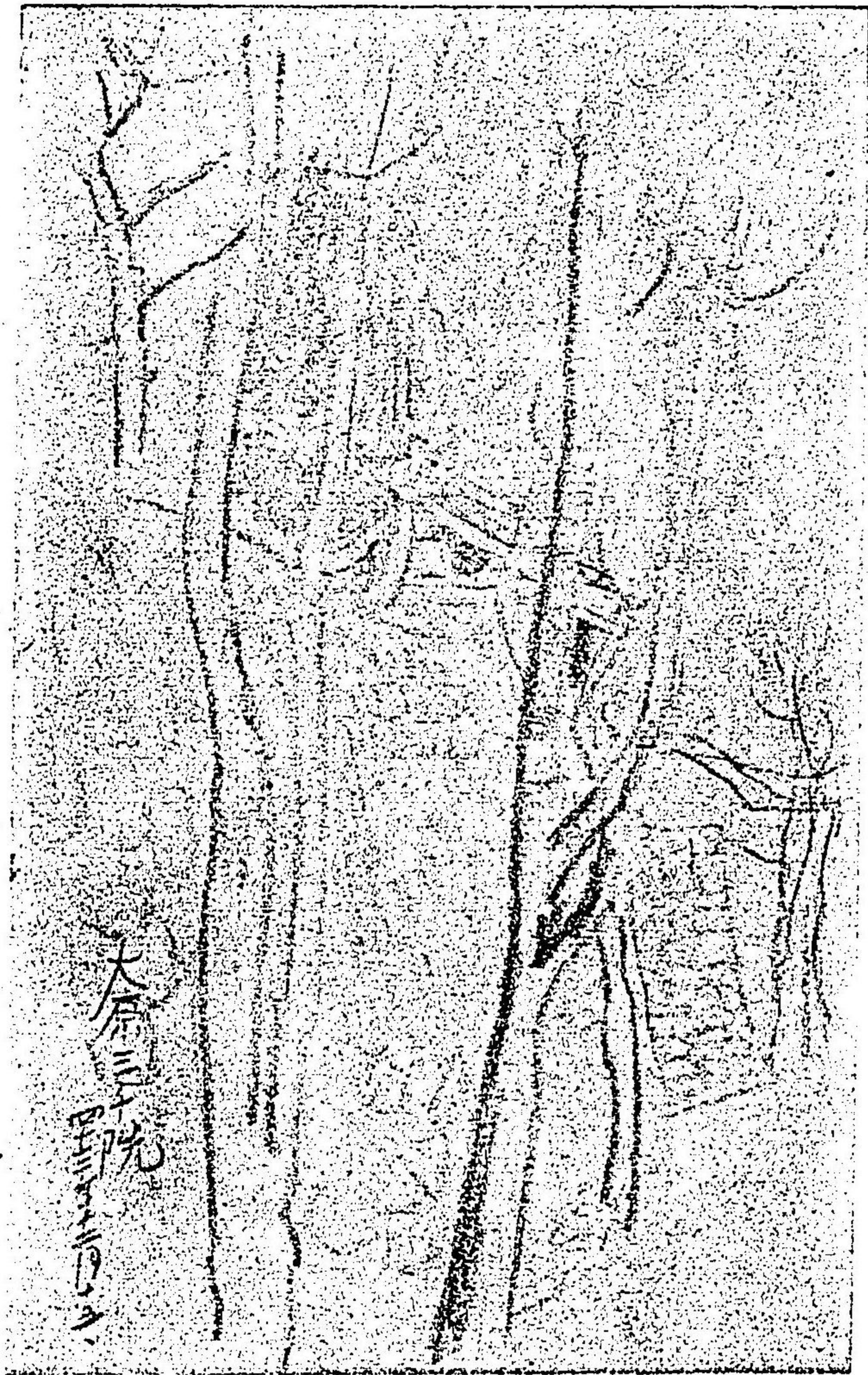


湖 八





三十三間堂



大倉三十三院  
三十三間堂

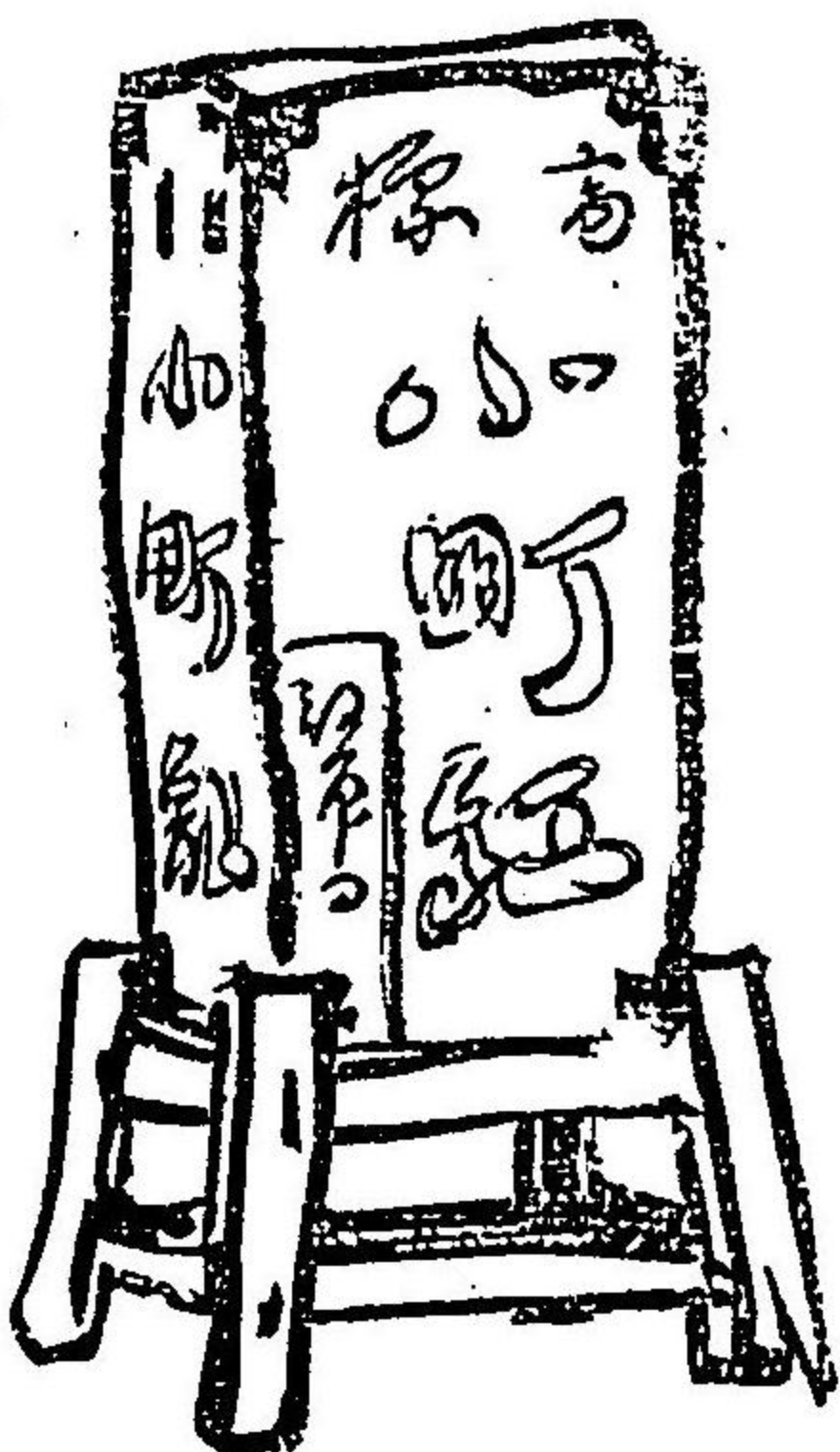
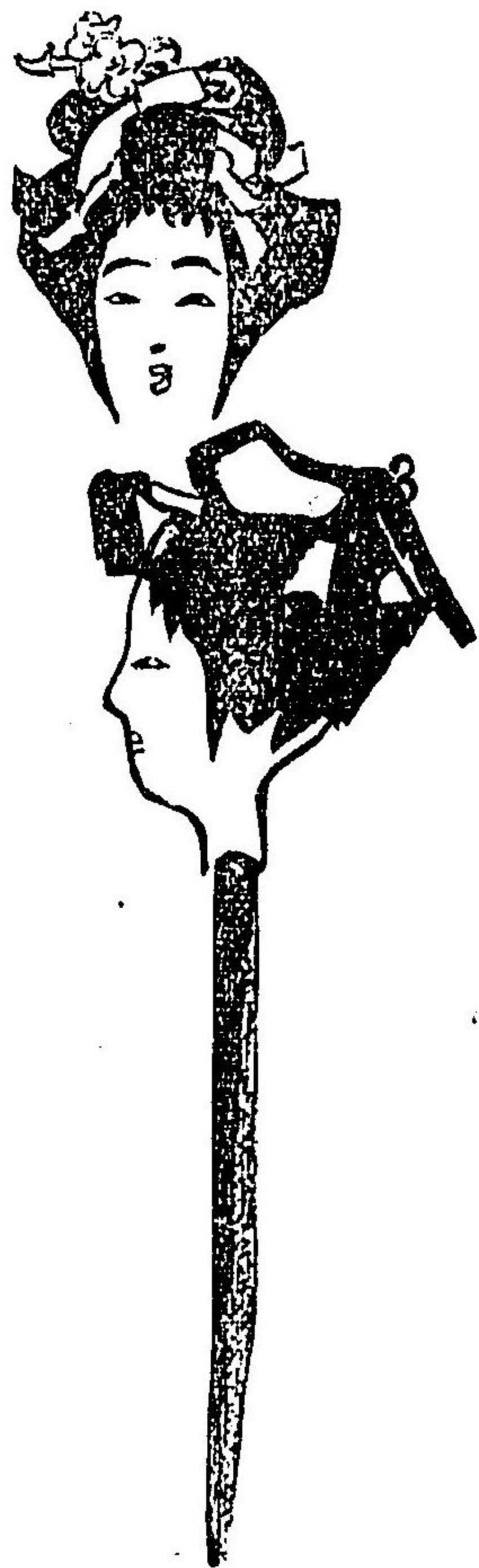
三十三院

# 京 都

蒲 原 有 明

この舊都にはじめて足を踏み入れた予は、眼には微笑の影をたゞへて、心には或る反感の情を起さずには居られなかつた。それは予の嫌ふ現代的平俗が、矢張りこの市街をも壞して行つて、その外観を淺く見せて居る爲であらうか。外光を怖れるやうなペンガラ塗の店格子がセンセエショナルな廣告的裝飾に代つて行く爲であらうか。宗旨の信仰がいまだに平地に寺院の高い墓の波を起して、寺院そのものが藝術的對象としてのみは取扱はれぬ、その過渡の濁つた情調を看者に強いるものがある爲であらうか。そしてこれらの背地の上に女の姿が餘りに浮き出して居て、京のほひを誇つて居る爲であらうか。

かゝる光景に依つて、初心な順禮者は惱まされるのである。然しながらこれは他愛





もない反感である。見得坊のすることである。

その外に、京の自然には柔くてまだ何處かに粗いところの残つて居るやうな矛盾がある——その矛盾が予の嘆美の心を免もすれば亂すのである。山の姿の圓さと常盤木の繁つた森の深みとは、千年の歲月を経る間に人間の方がよく調節し得た畫稿である。即ち京の自然の輪廓の柔さは全くそのアチフィシャルな趣を語つて居る。その自然を當躰とした人工美に對するに、原始的な自然の碎片がまだ著るしく残つて居て、時としては諧調を缺く虞れがあると、予は思ふのである。こんなドラマが果して容されるか何うかは知らないが、例へて見れば、彼に加茂川である。木津川や宇治川の持色をも有して居ない瘦せた溪流の野趣を予等は都會のたゞ中に見ようとは思つて居ない。上加茂まで遡つて行つた時、加茂川の溪流としての真相はやゝ得られるものであると信じて居る。三條、四條の橋の上に立つて、白茶色によごれた礫をながめた時の印象は決して愉快なものではなかつた。人工美の勝利がその設計者に依つて得られるものならば、予は近來京都市の問題であるらしい加茂川改修といふ事に賛意を表する

のである。

そしてこゝに附記して置きたいのは、かの名高い叡山の遠望が存外平凡であることである。

兎に角、原來はさして柔らくも、凡流を抽いても居なかつたらしい京の自然に濃やかな Emotional tone をかくまでに加へ得た舊文明の静かな力に對して、予は無限の尊崇を拂ふのである。それと同時にこゝの藝術的零園氣と享樂的豊饒に比して、江戸文明の根底の淺かつた新しい東京の没趣味を考へずは居られなかつた。

こゝの土には既に藝術化された夢が埋まつて居る。それが伽羅であらうとも、臙脂であらうとも、粹の魂であらうとも。然してその夢を掘り起すことは少しく天分のあるものには真に容易なことやうに思れる。偶々藝術家の稟性が強くなかつた時、四條派の弱所を襲ふやうになるのは免れ難い數である。

今年の三月、黒谷へ志して岡崎の町へかゝらうとする時、不圖足を停めてあたりを

願みた。その日は朝からこまかい春雨が降つて居て、湿度の多い空気を透して、前面には黒谷の濃密な森と塔とが見わたされる。この小高い森の姿は、前回はじめに京に來たをり、疏水のほとりから眺めただけであつたが、その暗示的な寫象は其後も予の腦裏から滅え去らなかつたのである。今また丁度その黒谷と相對して、都ホテルから智恩院のうしろの森へかけての東山の Profile が極めて美しい線を煙のやうな銀灰色の雨雲の間に浮べて居た。予はこの風景に魂を漂はす自由を保ちながら、予の考察の撃がるところは、おのづから又「宗教」であつた。京にあつての觀照者は「寺」と「女」とを飲むことは出來ない。そしてこの舊都に最もふさはしい宗旨は天臺でもなければ、臨濟でもない、勿論本願寺一派ではないのである。岡崎の里に立つて華頂山と紫雲山とを南北にながめた予には、それがどうしても浄土宗であらねばならなかつた。尼衆の多くを率ゐ來つたこの宗旨は日本のカソリシズムである。夢幻的で憧憬的な教義の上から言つても、また此處に立つてこの兩本山を藝術觀照の目的とした上から言つても、浄土宗が他の佛教諸派よりも、都會の生と美と品位の上に一層親密な關係

居る。これを有することは争はれない。

「さうだ、こんな空漠な情念のうちにも深く索めて行つたならば、屹度何物かがあるにちがひない。しかし餘計なことだ。俺はたゞ俺の見た風景を Appreciate すればいいのだ。こゝで見た東山の景色としての價値は所謂 'Evanceence の美だ。』

こんな感想に耽りながら、予は新しい家並の多い岡崎町を、半ばは遊覽者のあわやだしい氣分をまじへて、通りぬけて行つた。傾けた傘のつまから眞珠の雫が數珠のやうに光つて墮ちた。

95

南宗畫が京都に輸入されて、大雅や蕪村を出したことは、ところから言つて、如何にも不思議なやうに思はれる。然しながら南宗畫の價値を主として感覺的夢想の藝術として認める時に、藝術境に對する畫家の自由な Vision が、一の大雅、一の蕪村を陶冶したことと何等の支障もない筈である。近ごろ高安月郊君から大雅の瀟湘八景の印畫を示された時に、その中の月夜一枚が構圖から言つても、情趣の側から

味つても、かのキスラーの Nocturne in Blue and Silver, NO.1. を直に想ひ起させるものがあつたので、頗る驚かされた。大雅もキスラーも『藝術』の夢を懐抱して、著しく個性的な畫を作つたことに於ては同じである。殊にキスラーが錦繪の柔らかい灰色の調子から、更に進んで南宗畫風の布局と筆致に到達したのは偶々キスラーの感覺の鋭かつた證據である。

然しながら大雅がよし予の藝術心に強い刺戟を與へたとしても、京都に對する予が憧憬は起らなかつたに違ひない。それには光琳を埃たねばならなかつた。カラリスチックでデコラチヴな光琳の畫風は、過去の、或はまた予が夢想の京都の Esquethio 畫を最もよく思はせるものがあるからである。とはいへ當時の予には「光琳」の名は、漠然たる傳記の碎片と豪華な逸事を有て居るロマンス中の一畫人の名に過なかつた。予が親しくこの畫家の作品の多くに接する機會を得たのは、三十六年四月に東京帝室博物館で開催せられた特別展覽會に於てである。この展覽會から受けた感銘と色彩のイリュウジョンは予の終生忘る可らざるものであるにも拘はらず、其後この

一派に對する興味を中心點は光琳から光悦に移つて行つた。光悦は光琳よりも更に京都の地を想はせる力があつた。鷹ヶ峰にかくれた老いた Dietante が若々しい姿で予の眼に映じて來た。

九州に下つて石斛や石楠木の花を見て來た予が、遽かに京都に入つて、容易に京都の空氣に馴らされなかつたのは、素よりその筈であつた。五月のはじめの稍蒸熱い日に御苑あたりの若葉はさすがに美しかつたが、南禪寺から清水へかけての半日の遊覧は遂に何等の印象をも止めなかつた。其夜泣菫君と共に月郊君の家を訪つたのである。月郊君はかねて光悦及その一派を慕つて居られた。書齋の床には河骨に鴉の鳥を配した珍しい宗達の小幅が懸かつて居た。灰色に曇つて時代ずれのした紙本の中から、水草の葉の幻が浮んで、そして靜かな燈火に照らされて居た。

「この畫には象徴的ともいふべき味がある。」と主人が言つた。  
この宗達は寧ろ光悦に近いものであつた。想ふに光悦や宗達には光琳よりも深い藝

術の夢があつたのである。その夢が幾代を隔てた吾人の胸に通つて來るのである。光琳は光悦又は宗達からデコラチイヴな妙所を承けはしたが、そのシンボリックな精髓を傳ふるには、餘りに豪華であつた。然して宗達の傳記は殆ど詳かでない。彼等の孤獨な生涯を追想してゆく時、吾人の憧憬はどうしても光悦に遡らねばならないのである。

『京に來て居ながら鷹ヶ峰も知らないでは全く話しにならんよ。』と主人はまたかう言つた。『君も光悦を慕つて居るなら、明日はそこへ案内をしよう。』

こんな譯で、予は餘り人の行かない太虛山光悦寺に順禮するやうになつたのである。

金閣寺から折れて行くと、御陵の瑞障には扇骨木が赤い若葉をそろへて日に蒸されて居たが、かの旅客や遊山の人の興を牽いた鏡石は雲母のさびに曇つて居た。予等は紙屋川を渡つて、草むらを披いて上つて行つた。ここは素より本道ではないのである。稍強度の傾斜面の中途に光悦の建てた太虛庵の址が少しばかりの平地になつて残つて

ゝを上りつめると光悦寺の墓地に出る。わが師の墓は位碑堂のうしろにあつて、質の粗い花崗石が茶褐色に鐵鏽を帯びて居た。寺といつても形ばかりであるが、坊守に頼んで、光悦が古歌を染めた秋草の色紙を見せてもらつた。舊は太虛庵を飾つて居たといふ周圍に文字を刻んだ手水鉢が庭の隅に据ゑてあつた。廣からぬ庭は直に紙屋川の谷に臨んで居る。その谷を隔てたむかふの形の圓い丘が軒端にせまつて居る。そのはづれから東山一帯を遠く淡碧の霽の中に眺めることが出来る。こゝで寺の古印を所望して紙に捺してもらつたところ、それが常照寺の印であつた。

常照寺は光悦の子の光瑳が建てた法談所であつたさうである。光悦寺と丹波街道を隔て、僅一二丁のところにあつたが、今は無住どころか、百姓の物置に使用されて居る。そして朽ちかゝつた堂の椽には近所の小供が群がって居た。『學堂』と白く讀まれる正面の額が半は壊れて、その裏には雀が巢をくつて居た。埃にまみれた階段の上には雀の子が醜い死骸を晒して居た。こゝの墓地には名妓吉野の墓がある。あたりに咲いて居た草花を折つて、それを手向けて、月郊君は携へて來た酒を漚いだ。昔の香

と酒の香のアレンジメントがゆくりなくも美人と老藝術家をロマンチックな幻想のうちに結合させる。その幻想に現はれた光悦はやゝ蠱惑者の相貌を有して居た。

光悦の母は堅氣のモナリストであつた。然しひどく日蓮宗に歸依したところに、この母の性情の傾向も急斜して居たことが窺はれる。本阿彌家の本業によつて幾代か鋭くされた感覺は、光悦に到つて、あらゆる技能の上に發露する機縁を得たのである。そして光悦は形の如き Dieltante となりすました。Dieltante はまた Bogist である。當時の庵の主人や茶室の主人が吾人の注意に値するのは、彼等が Bogist であつたからである。光悦が決して家を關東に移す勿れと子孫に書き残した一事に見ても、如何に彼が主我的人物であつたかわかる。

予等は鷹ヶ峰から大徳寺に向つた。利休居士の墓に詣でた後、有名な孤蓬庵を一見した。大小の各室は皆茶席であつて、中央の廣間に佛像佛具を莊嚴してある。花崗岩

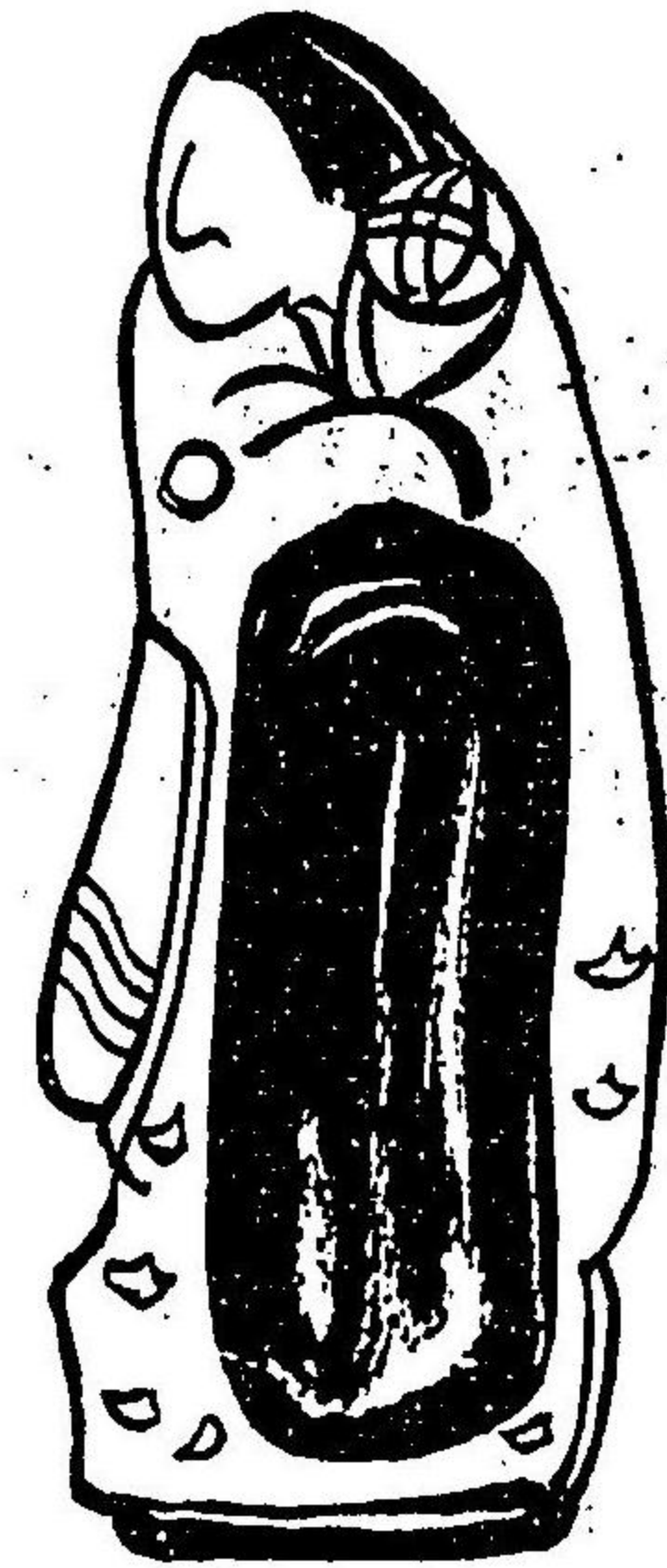
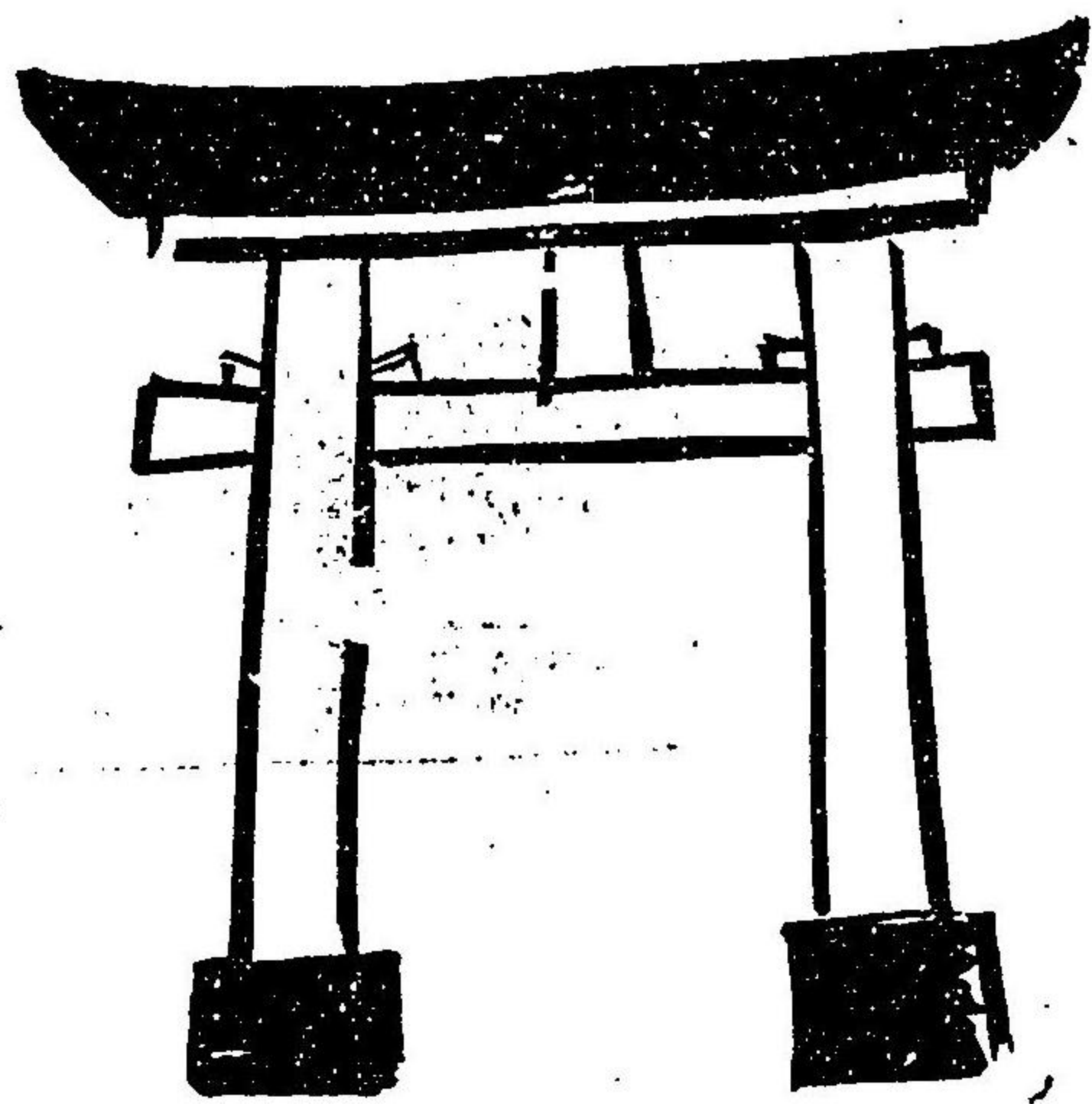
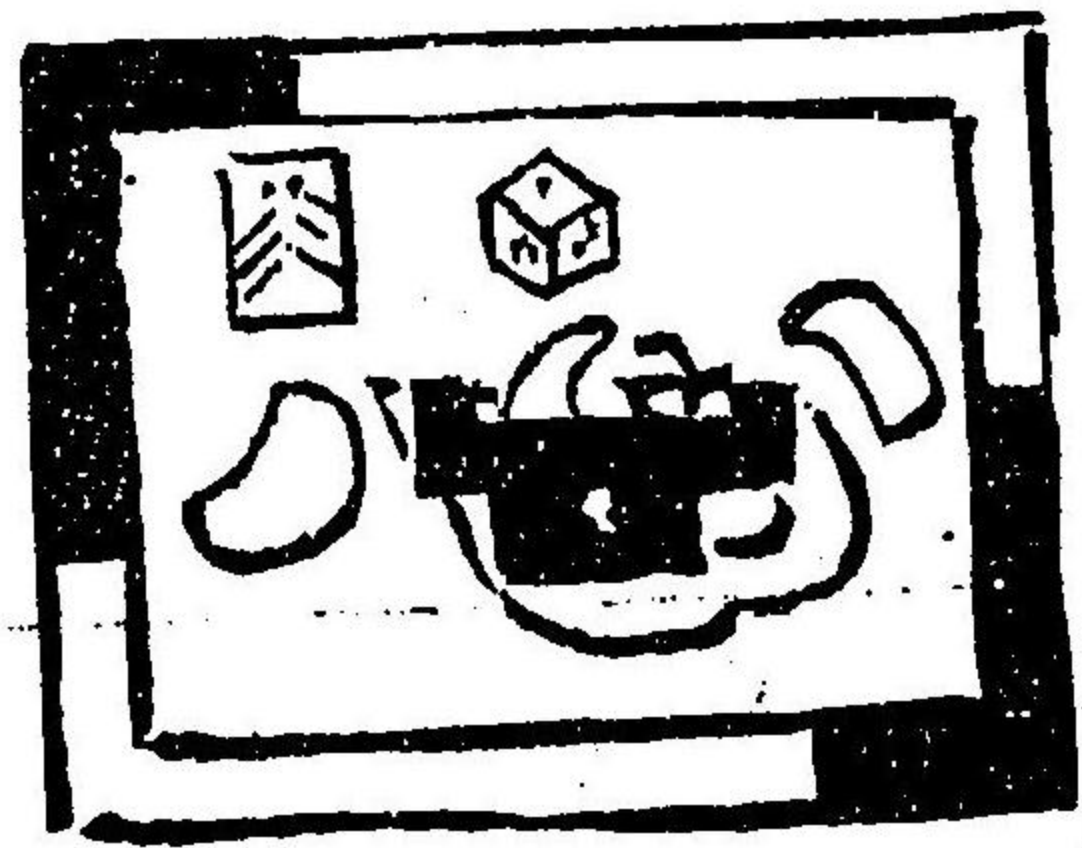
の莓爛した、露地の砂の上にはヒカゲノカッラが一面に純緑の唐草模様を描いて居る。予は茶室の結構に就ては何等の智識も有して居ないが、茶室の主人の抱いた夢に關しては、予一個の理解がないでもない。當時の茶室が主我的觀照者の一群を牽引した事情の下には A Recours の主人公の夢想と相似ものがあつたに違ひない。すべての感覺の合奏が、この隱遁的形式の中に集つた Dieltante をよろこばしたに違ひない。兎に角茶室の歸依者が邪宗として見られなかつたのは、最初から宗教を楯にしたからである。佛教の中でも殊に神經質な禪宗が茶道と結合したのは極めて興味ある事實である。

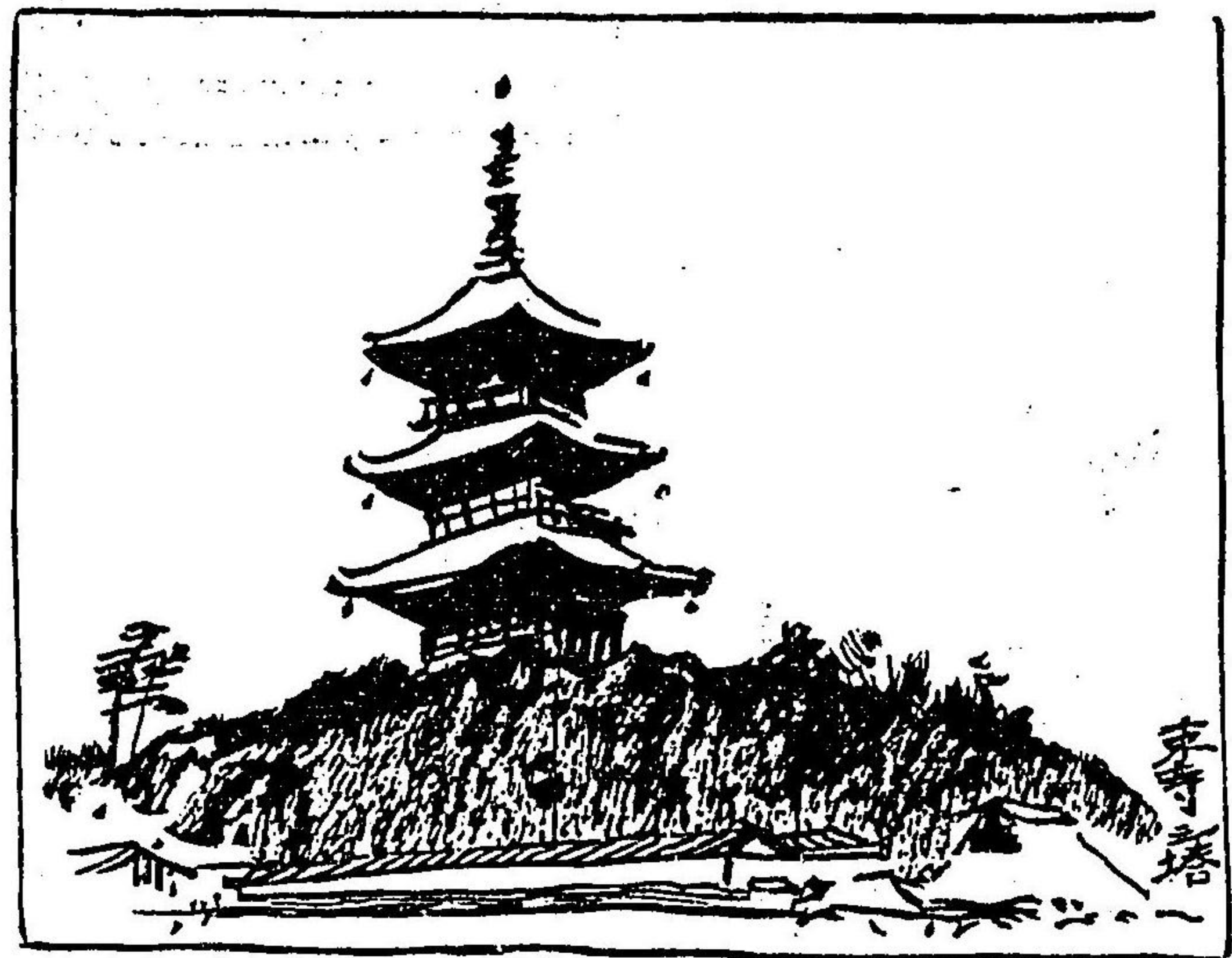
佛教や茶道の蠱惑から全く遠ざかつた境地を予は上加茂で見ることが得た。神社の境内の清淨さは寧ろ潔癖の發露を思はせる程であつた。予の神經はこれが爲に微かな痛みをおぼえた。橋の袂にあつた一本のアカシヤも、その境地の純一を破つて、鞞鼓の音にキオロンをまじへたやうな不調和を、予は此處で感じたのであつた。

予の京都は餘りに俗氣を離れて了つた。然しながら市井のデテイルを描寫するに  
ては、予は未だそれ程京都の生活に馴らされて居ないのだ。

それにしても、春雨の夜の祇園の酒興を、予はなつかしく思はず居られなかつた。唐木のやうに古びた光澤のある柱に、華やかな蠟の火のこぼれるにほひには一種の哀情を牽くものがあつた。河原に千鳥が啼いた。隆達の夢の世がその聲のうちに溶けてゆくやうにも感じられる。狹斜の遊樂がコンヴェンショナルであるのは、都會の女の顔がタイピカルであるのと、同じ筋を行つて居る。舞妓の顔がタイピカルであればある程、京都といふものがよく現はれるのである。そしてその個性を没したやうに見えるところに、遊客は安んじてこの舊都の空氣に酔ふことが出来るのである。「男はよし、員子はあり、親はなし、浮世は閑」といふ、この資格のことくくに飲けた予は、將又自他の個性を重んずる予は、どうしても祇園を去つて、茶室の群に投ずる邪宗の徒であらねばならぬ。(四十三年十二月)







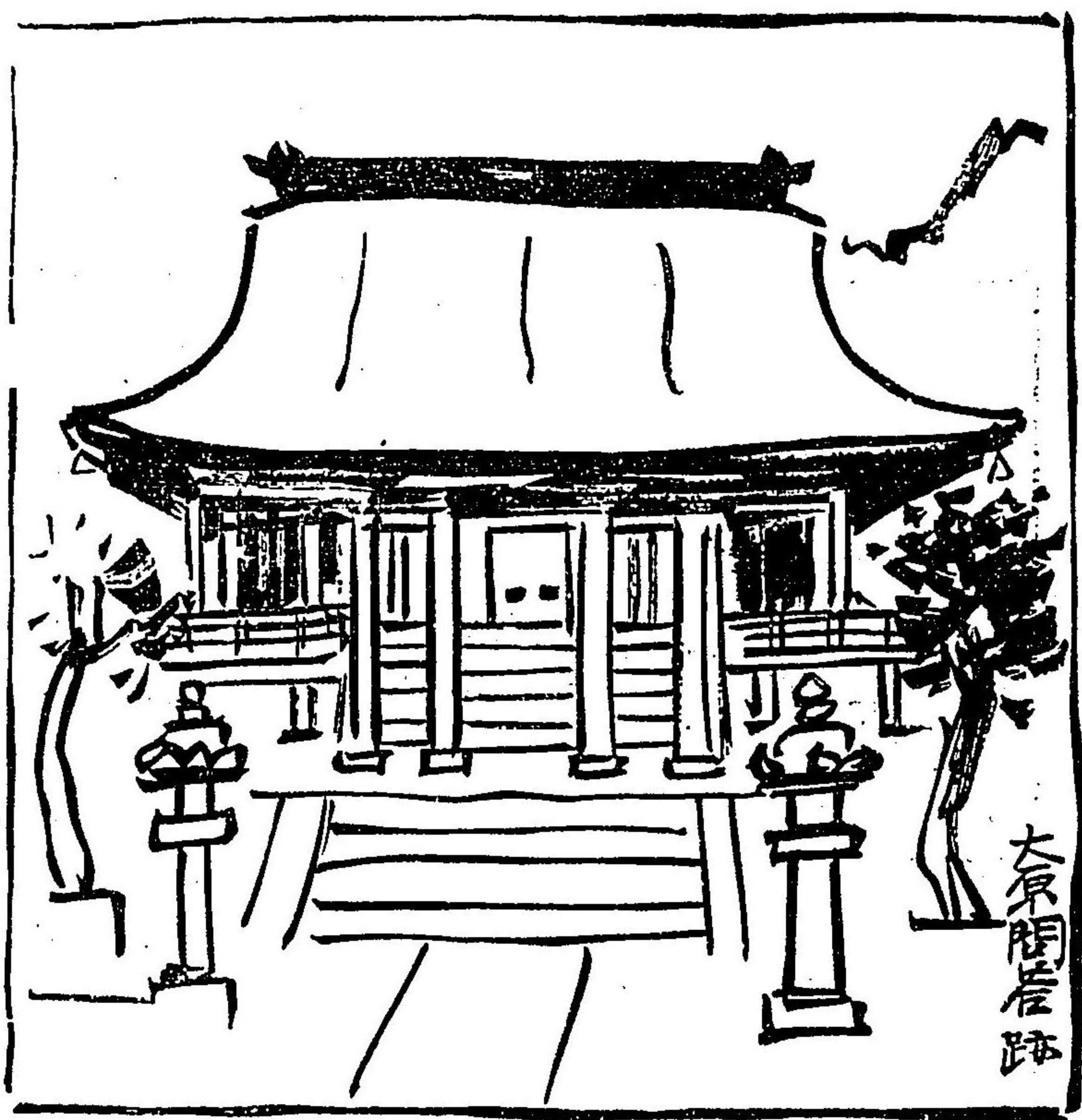


# 京 都

## 京都の秋

薄 田 泣 堇

十月十九日。仕事をするには勿体ないやうな日和だ。私はふらつと家を出て御苑に入つた。そして例の棕の樹蔭に立つて、これから何處へ往つたものかと一寸咒つてみた……咒といつたところで、私のは別に不思議な術をするのでも何でもない。——これから追々霜柱の立つ頃になると、那の氣性物の鷹などが、夜徹し暖め鳥といふ事をして、夜の引明になつてそつと其の鳥を縦してやる。で、其の日は鳥の逃げた方角へは、忘れても餌を捜しに出ないといふことをいふ。私のもまあ言つてみれば、そんなやうなもので、家を出て何方へ往くと目的もない折には、途の辻で真直に杖を立て、みて、その倒れた方角へ足を踏み出さうといふのだ。それも方角によつて定まつ



た土地があるといふのではない。先づ此頃では東へ倒れると、河を渡つて岡崎から吉田へ出る。西へ倒れると聚樂から西の京へまはる。——他は如何か知らないが私には此附近が何となく面白い。東京都の岡崎から吉田へかけて、段々と東京じみた新しい都になつて行くのに比べて、此邊の容子は恰で往時の儘で、どうかすると段々と荒れてゆくらしい。軒の低い、燻んだ町の石高道を徜徉して、時々空咳のやうな絹機音を聞いたり、安普請の機械場のがたびしと悪寒でもするらしい、地響に出會したりすると、恰で右肺の腐れかゝつた病人を診るやうに妙に闇に闇に沈むた氣持がして来る……杖が北へ倒れると、上御靈から北野まで行く。南へ倒れると、御所を真直に堺町へぬけて三條通の丸善へ遊びにゆくか。さもなくば錦の附近をぶらついて歸る。錦小路といふのは京都の魚市だの青物市だの、あるところ、那樣した土地をぶらつくといふと、何だか平常も食意地が張つてるやうで、甚く下司じみてゐるが、私は實際あそこいらを徜徉するのが好きだ。だいつ廣い店先に甘藍や林檎のころころと轉がつてゐる色合を見たり、びちびちした海のもの、鹹つばい香を嗅いだりするのには、丁度丸善

の店に往つて、ぎつしり詰つてゐる背皮附だの、布綴だの、書物を手當次第に引張り出して、表紙の意匠を吟味したり、頁に鼻を押付けて、眞新らしい墨汁の香に觸れると同じやうに、何といふ事なし胸がすつとする。唯時々私の氣になつてならないのは、八百屋の小僧が黒く腐れかゝつて、蠟脂が走りさうな芭蕉實を滑こい林檎の肌へ凭せかけたり、丸善の店員が Dante の隣へ Maxofel を置いたり、Maeterlinck と Paul de Pock 一緒に積重ねたりする事だ。商人から見れば、孰方も同じ商品で、混雑に置いたからつて、別に差支はないかも知れないが、私のやうな厄介な性分に生れつた者には、どうも其が氣になつてならない。

で、その杖だが——今日は夫を立て、みると、ばつたり東へ倒れた。そこで丸太橋を渡つてぶらぶら東へ歩いて往つた。其邊の壁といふ壁には茸狩の案内だの、冬物の賣出しがべたに貼りつけてある、その無様な文字や小供らしい意匠が私には一寸面白かつた。町の角に一軒の小ぼけな洋酒屋が出来てゐた。事によつたら以前からあつたのを、私がつい氣がつかずにゐたのかも知れない。ふと立ちとまつて覗き込むで見た。

私は別に人並外れた酒飲といふでもないが、他の家よりかすつと洋酒屋の店前が好きだ。種々な形の、種々な大きさの硝子壺から、さらさらと透き徹るやうな酒の色を見てゐると溜らなく嬉しい。洋酒屋に次いで石鹼屋の店前が好きだ。種々な化粧石鹼のなかに交つて、黄ろい包紙から、焦色の洗濯石鹼が食み出した儘ころしてゐるのを見ると、恰ど印象派の氣持その儘を見るやうな感じがする。

程なく櫻馬場に来た。

私はふと思ひ出した。先日からこの博覽會跡で、關西美術院の洋畫展覽會が開かれてゐるのだ。私は平常から京都の油繪の厭に固過ぎて、一体の情調を重んじないのが、どうも氣に喰はないのだが、兎に角入つてみた。

出てみると、まだ五分も経つてゐなかつた。通りがかりに一寸事務所の入口を覗き込むと、其處に居合せた畫家のSさんは、何だか物足りなさうな顔をして、

『もうお歸りですか、随分お早いですね』  
と厭味たつぷりな口を訊いた。

『一寸急ぎますから、何れまた緩りと……』

私は憊ういつて言譯をして、其の足で直ぐ手近の動物園へ入つて往つた。

其處では芝草の繁つた、落葉樹の蔭に寝そべつて、青い空を見つめたり、南國の森に生れた鳥や獸の焦々した、怒りつばい生活を覗き込むたりして、小二時間もゆつくり遊ぶでゐた。

十月二十日。松茸賣の聲がうるさい程窓の外を通り過ぎる。

『地松山茸いりまへんかあ——』

と緩くだらりと引張る調子は、まるで平らかな柔味のある京都の山の外廓その儘で、聞いてゐるうちに何だか睡つぽくなつて来る。

暫く書物をしてゐると、矢鱈に欠伸がつくので、私はふらつと外へ出てみた。

この頃は毎日のお天氣で、空を見ると氣がせいせいする。一體山國の故か京都といふ土地は秋の彼岸前後からは空氣の調子が透き徹るやうに冴えて来る。廓然と浮上つた山と山との折重つた巖だの、皺だのには、薄い紫がかつた影が隈どつて、其邊の遠近

と濃淡とがつい掌面で觸れさうに、はつきりして見える。こんな時節になると、山といふ山の上には大抵乳色の雲がふはりと浮いてゐて、日射の工合で折々平らかな山の背に、ぼうとした影を落す。それが濃くなつたり淡くなつたり、どうかするとそつと動いて山越しに消えてしまつたりするのを見てゐると、恰ど私達の胸を通りすぎる種々な考へその物を見るやうな氣持がする。

前方から親子らしい二人連の婦人が來た。中京邊のもので、母親は堅い内儀さん育ちといつた風なのに、娘は如何やら學校出の跳つ返りらしい。顔の造作は一目見たら十分だつたので、私はじつと足を見つめてゐた。實際その歩き方といつたら、二人が育つた時代の此上も無い宜い對照だつた。親はしとやかな内輪で、刻むやうにちよくちよくと急いでゐる。娘は大跨な外輪で、爪先で物を蹴上るやうにして、歩くといふよりか寧ろ飛むのである。一人は茶室の立居ですつかり馴らされた身の態度。一人は西洋の式で教はつた運動場での身振で、一緒に肩を並べて歩いてはゐるものゝ、如何して些つとも歩調が合つてはゐない。私はそれを見てゐるうちに、何だか拙い音樂でも聞

かされたやうに一寸蟲腊が走りさうになつて來た。

とにかく婦人の歩き様まで變つて來た。私は今時の娘に恰で茶室の出入にするやうな身の態度で、氣忙しい電車路を衝切らせやうとも思はないが、何かして今少し氣持のいい歩き方は出来ないものか知ら。一體に今の女は裾さばきが拙いので、足を踏出す拍子に、ひよつとすると衣の裾までがまくれて、無格好な太い腓が見かゝつたりする——腓といへば、私は現代の女の思ひきつて腓の太いのに驚いてゐる。女子教

育は妙な邊へ皮肉な成功を見せたものだ。そんな事を考へながら、じつと途に衝立つてゐると、旅の學生らしい者が三人連でやつて來て、大徳寺への途をきいて往つた。そのなかの一人が別れ際に一寸首を傾げて、

「此方の方は何故帽子を冠ないので御座いませう、矢張土地の習慣でも……」  
と妙な事を訊いた、實際京都の人は帽子を冠らない。そして櫛目のたつた、油でてかてかした頭を自慢さうに露出しに歩いてゐる。

「さあ、大方着やうにも頭が無いからでせう。」  
 私が眞面目臭つて憊ういふと、その男は冷かされたやうな顔をして、黙つて連の後を追掛けて往つた。そのあとで私は密と頭へ手をやつてみた。まあ、善かつた。古いのは古いが私は帽子だけは着てゐた。

四條寺町の旋風

午過ぎぬ。日はわびしげに  
 四辻の巷にうるみ、  
 都路はもの疲れして  
 たゆげにも微睡むこち。  
 ゆくさ來さ、男女は  
 夢の野にすする往くかに

足ぶみの音もしめりて――  
 商人は亡き人の名を  
 想ひいで、はたなつかしみ、  
 俳優は見る代の様に  
 酔ひほれて見とる、こゝち、  
 物賣はしづかに唸み、  
 乞食女も忍びにあゆむ  
 午さがりし日はわりなくも  
 静心知らず儼れて、  
 つむじ風ふと思ひたち、  
 そそめきてかしま立ちしぬ。  
 乾かわきし地は胸さわぎ  
 けばだちぬ。白楊の落葉

そそくさと先走りしぬ。  
 土ほこり垢埃はそそけて  
 螺形にすぢりぬ、舞ひぬ。  
 故知らず、はた何知らぬ  
 時めきの、さところ渦に  
 くるめきて爪立ちあがれ、  
 釋心の唄、葉のしら笑ひ――  
 ゆきかひの人あたふたと  
 物音のさわがしきかな。  
 俳優は走りぬ、――白き  
 蹠のなまめき、――たたと  
 ふためくや販ぎ女ふたり  
 ふと夢に物おびえして

啼ぐかに經師が家の  
 招牌もこそ嘆きぬ。――ひとり  
 さりげなき面持、つつと  
 往きすぎる若き唄ひ女、  
 あと呼びつとこそとまれ。  
 ふくら脛肌しも断れ  
 蹠はにじみぬ、朱に。  
 見ず知らぬ人の誰彼、  
 はしり寄るひとりと言ひぬ、  
 「かま黽 妖の使ひ女  
 盗食みに生肌をこそ  
 噛みつれ。」とはた咬やけり  
 「肌じろの蹠なれば、

淫なる魔の係跡にしも  
 落ちけめ」と。あな唄ひ女は  
 血酔して顔青ざめぬ。  
 われならぬ不可思議の世に  
 見おどろき、さては見入りて  
 柔肌のしろき心に  
 蝮のもの執念さは、  
 この日より萌しぬ。風は  
 そくそくと横走りして、  
 末廣に街を西へ――  
 落葉のみ咒の古經の  
 文字の如、残りぬ繁に。

貌

岡崎の紀念動物園に猿の着いたのは、秋日和のほかほかする午後三時過であつた。  
 そこで界限の鳥だの獣だの、古顔仲間では、二三日前からこの新参者の噂ですつかり  
 持ち切つてゐたので。それらしい車の音がたびしと聞え出すと、誰も彼も赤錆の浮  
 いた鐵格子に捉まつて伸び上つたり、樹肌のさらさらになつた埒に凭れて物好きな眼を  
 さよろくさせてゐた。すると染ぬきの印半纏を被つた四五人の人夫が、鐵格子の隙  
 つた狭苦しい檻を車に積むで、何だかがやがやと談しながら門に入つて來た。皆はい  
 つばし伶俐さうな顔をして、この新参者を眺るやうな、それで何處かに氣の毒がるや  
 うな眼付をして、じつと檻の内を覗き込むだ。  
 檻の内には無氣味な鼻をした、尻尾の短い、もじやもじやと毛の生へた、瞥見の憤に  
 似た猿が窮屈さうに中腰になつて蹲むでゐた。石ころ路にがたりと車の輪が軋むと

猿ば機を食つてべたりと尻餅をついた。

すると、横手の事務室の扉がけし飛むやうに大きく開いて、なかへら河馬のやうにづんぐり肥つた園長が飛び出して来た。今まで卓に凭れて、やかましやの女房さんと汁の加減か何かで口汚く言ひ合つた夢を見てゐたので、腹立紛れに突慥食に指圖をみると、人夫はびたりと車を止めて、慌てゝ頬冠をとつて挨拶をした。園長はづかづか檻の側に寄つて来て、今日からまた一人殖えたこの居候に、主人の御威光を見せつけるやうな態度で一才氣取つてみた。無作法者の猿は初のお目見えなのに、先日中からの旅疲れで、尻餅をついたまゝ、こくり／＼と居睡つてゐた。園長は古履の爪先で、小酷く檻の羽目板を蹴つた。車はまた砂利を噛みながら、すすん奥へ入つて往つた。

『何だ詰らねえ、己あもつと恂う形の美しいものかと思つてた。』といけぞんざいな口を切り出したのは、恂ういふ場合一番に何か云はねばならないものになつてゐるおつちよこちよいの猿吉だつた。

『まあ厭な、何て間の伸びた顔なのでせう、時勢おくれよ、乾度。始終山にばかりゐるものだからねえ。』

深太刺利産の袋鼠は、こましやくれた口振で恂ういつて、用もないのに氣忙しさうに其邊をちよこまかしてゐる。

『さうだよ、それに奴明けても暮れても夢ばかり舐るつてからね。まあさ、恂うして都へ出て来て、世智辛い世渡りを見るのも身の得つてなものさ。』と、背のひよろ高い亞刺比亞馬は、自分では一ぱし生へぬきの上方者の積で、艶々した鬘をばざりと顔はしながら、一寸済ましてみた。そして仇つばい眼つきで、隣檻のそれ者らしい寡婦暮

しの驢馬を振りむいてみた。

驢馬といふのは、評判の引摺で、今が今も其邊一杯に引散した寝蓐のなかで、だらしのない居すまひをして、以前昵懇を重ねた跛者の情郎を思ひ出して、しんみりとして居たが、隣から聲をかけられると、何の事たか一寸了解がつかなくなかつたもの、直ぐ笑顔になつて、



『眞實だわ、ねえ、お前さん』

と巧く調子を合せた。いつも恠うした甘つ垂い口振で、相手の氣心をひいて、偶にどうかすると食べ餘しの蕨屑をものにしたりするのだ。

『餘り見込のありさうな面でもねえな』と猿吉は、恰と容貌自慢の女が敵手の娘に一寸した眇の氣振を見つけたやうに、嬉しさうに鼻先をびくびくさせて、『人間つて野郎も些と物好が過ぎらあ。物もあらうに那麽……』と圖に乗つて、何か喋舌り出さうとしたが、ふと後方を見ると、河鳥の園長が、背を圓めてのそりのそりと通りかゝつてゐたので、慌て、飛び退いて、何喰はぬ顔で顎を撫でまはした。

静かな日で、噴水の附近では黄ろい木の葉がカナリヤのやうな格好をして、引切なくちらほら零れてゐた。日當りのよい向側の三號の檻では、こましやくれた焦色の栗鼠が、先がた二人連の悪戯兒が投げて往つた團栗の殻を嚙つて、ぼつりぼつりと堅い齒音を立てゝゐる。その隣檻では西比利亞産の狐が、前刻から一乗寺附近の農夫らしい男が、折角三圓八十錢もかけて手に入れたブリモリスロツク種の雛兒を三羽まで、

昨夜寢込にすつかり野良狐に仕てやられたといつて、その腹窓に縷子張の蝙蝠傘の柄で、小酷く鐵網を衝つさまはしながら、

『何やと思ひやがるんだい、自然著賣り溜めて漸と手に入れた鶏やないかいな、あふんだらめ、償せ、償せ。』

と、うるさく報復をするので、狐は迷惑さうな顔をしてうろく逃げまはつてゐる。すつと離れた堀割の縁では、夫婦ものへリカンがまた例の口舌でも始めたらしく、不平面をして何か頻とぶつつかつてゐる。

すると、だつ広い七號の檻で、のそりのそりと重さうな脚音がして、禿ちよろけの駱駝が雨腐れになつた埒に、長い首をもたせかけたと思ふと、横嚙へにした喰べさしの蕨屑をばくりと鶉飲にしてしまつた。そして、

『夢ちふて、一體何ぢやぞい。』と誰に訊くともつかず飽間な口をきいた。

『貴方はん、夢知んはらんのかい、齡がひもないお方やなあ、ふわりふわりと人魂のやうな物やおへんかいな。』齡つ喰ひの貉が、寢臭い巢孔からきよとんとした顔を衝出

して言った。もと雲林院の附近にゐたのを、市區改正の折市役所の雇書記が手捕にしたので、その男は鰻登りに今は市の税務課長をしてゐるが、談話のついでには何時もこれを引張出して、厩金の鑑定に巧いのと一緒に、手柄談の二つに数へ込むのである。『嘘のう吐くない、知つたか風しくさつて。俺ちやんと知つてござるだ、無患子の枯葉みたにかさかさしたもんだのし。』と、息みかへつて、隣檻から穴熊が怒鳴り散らした。平常からの角目づきあひで、どうかすると憚うした口を利くので、貉は白い齒を露出して冷笑をして黙つてしまつた。

『口當りはどんなぞい。』と大物食の男だけに、駱駝は直ぐ憚うした事を聞たがつた、で鈍重な眼つきで一わたりすつと其邊を見わたしたが、別段これぞといつて食道樂らしい顔觸も見えないので、忌々しさうに頭を掉つた。そしてこんな時に那の筋違ひの檻にゐた荒物喰の肥大婦でも居たらなと思つて、先月の中頃食滯でついころりと死つてしまつた、ヨオクシヤア種の牝豚を思ひ出してほろりとなつた。

『何でも酸つばいのやさうだすな、酸模の葉を嚼りやしたやうに。』灰色の背をした野

兎が早口に喋舌つてのけた。

『嘘、酸つばかないのよ、蕨辛つばいつて事だわ、私タスマニヤの伯母さんに聞いて知つてよ。』と、袋鼠は皮袋の中からひよつくり顔を出した愛くるしい子鼠の頭を

そつともとへ押し戻して、若い子持女のするやうな含羞むだ態度をした。穴熊の隣檻では、物臭な狸々が秋に入つてから、から意氣地がなく始終古毛布に包まつて、うつら／＼としてゐたが、附邊の騒々しさに蠢々と起き上つて來た。そして

腫ぼつたい眼を擦り擦りして、

『蠢ましい、何だと思つたら夢の詮議かい、夢ならこれで己もな……』と一寸言ひさして、古い記憶から何だか引張り出さうとするやうに凝と眼を細うくして、『何だか憚う濁酒にでも喰酔つたやうにな、厭あに浮々してみたくなつたり、さうかと思ふと急に哀つばくなつたり、いやはや譯の分らねえ代物さ。』と、吐き出すやうに言つたがその夢を見たのは既う今からすつと以前の、暖い椰子の木蔭で妙の相手とよく乳繰合つた時分の事で、この五六年はねつから其の氣振もなくなつたのに氣がついて、何

だか一寸忌々しいと思はないでもなかつた。が、直ぐもうころりと横になつて、その儘こくりこくりと船を漕ぎ出した。

こんな事を言ひ合つてる間に、猿は駱駝の筋途にあたる第八號とある牝豚の空屋に逐ひ込まれた。人夫は大きな飼葉桶に一抱への檜の青葉と甘藷の刻むだのを混雑と投げ込みで、さつさと出て往つた。猿は無氣味な鼻をびくづかせて、應てばりばりと其を嚙り出した。

仲間は誰も彼も首をつき出して、奇異さうな眼つきで、飼葉桶を覗き込むでゐたが、何やら少し臍に落ちなささうな顔で、ひそひそと立談をし初めた。氣早な猿吉はするすると天井の金網に這ひ上つた。そして意地くね悪い三年兵が鈍間な新兵にでも出會したやうに、いけぞんざいな口振で、

『おい、おい……………』

と呼びかけてみた。

猿は今朝夜の引明からつい先刻まで、何一つ咽喉に通さなかつたので、腹はべこ

べこになつて、甚く食氣がついてゐたが、それでも黙つてのつそりと顔をあげた。

『お御、何をそんなにばくついてるんだね。』

『私は飯を食つとりまするだ。』

『飯は解つてらあね、その飯が何だつてことよ。』

猿は要らぬおせつかいをする猿もあつたものだと思つたが、つい昨日の午過だつたか此の國の港へ着いてから、船懸りの税關で氣むづかしいお役人の前とも氣がつかないで、つい大きな噓をしたのを、甚く癪に障へられて、餘計な税金をまで徴收げられ、おまけに棒切で厭といふ程横腹を小突きまはされた事を思ひ出したので、それでも素直に

『檜の青葉でござりまするだ、いやはや不味いつたらありませんねえ。』

猿はひよつと驅取にでも出會して、折角の餌を玉なしにでもされてはと氣配つた。それに猿公の眼つきが何やら少し客さうだつたので、いきなり口を一杯に開いて、喰べ残しをべろりと鞠呑にしてしまつた。

その可笑しい素振に見とれてゐた猿公は、一寸連の方を振りかへつて眼で笑つた。  
 『だつてお前、他の噂では夢を食んなさるつていふせ。何も此方人が裾分にならうつていふぢやなからうし、隠し立にも及ぶめえ。』

猿は飽聞な眼つきで、うそく相手の顔を見あげてゐた。

『いや、然う言はつしやりますと、何でもはあ其様な事もあつたげに聞いたりするだ……』と一寸小首を傾げたらしかつたが、何だか思ひ出し笑に吹出しさうになるのを、強て噛み殺すらしく、『夢もはあ、往時はえら美味かつたげだが、今時のと來たら、いやはや飛んでもねえ……』と獨語のやうに言つたが、恰と髪の中の長い、青白い顔をした妄想家らしいのが、連の男と一緒に噂の前を通りかへつたので、これ臭さうにそのまゝ黙つてしまつた。連の男は一寸振りかへつて此方を見たが、

『猿だな、此奴も今に産れ故郷を忘れる奴さ、可憐さうに。』

と、底力のある聲でいつて、肉附のいゝ腕を大きく振りながら歸つて往つた。

門番の小舎では螺旋の弛むだ古時計が吐くやうに五時を打つた。先刻から脚のよろ

くになつた古卓に凭れかゝつて、頬杖の儘こくりくと居睡つてゐた爺さんは、勢のない欠伸をしながら、棚の上の鈴をとりあげたと思ふと、いきなりがらんがらんと暴に振りまはした。

見物はぞろぞろ歸つて往つた。其邊の檜で精巧さうな口をさいたり、嚴らしい顔をしてゐた輩は、そろそろ既う晝間の嗜みを忘れてしまつて、赤錆の浮いた鐵格子に捉まつたり、埒に凭れて口をあんぐり開いて夕方の餌を待つてゐる。

腹が充満くなつたので、猿は徐々睡氣がさして來た。

### 蛸薬師前の臘臍賣

「これはもと擇捉島の荒海に——」と

お國なまりの言葉濁し「追つとりまさし

臘臍、海なる主」と痔ばみし

毛むくぢやらなる嬌笑つとこそ敏め。

七月の日は照りよとむ路辻の

砂ぼこりする露店に「なう皆の衆

北海の臘肺は實に」と汗ばみし

たゆげの喘ぎ、「生薬、一のやしない。」

路のへの柳の葉なみ萎びれて

嘆かひしづむ陰ひなた——あゝ海の主

臍肉の腐肉はいやに灰じろみ

黒血のにじみ拵づきて、かつ膿沸きぬ。

「これなるは白血の止め」と喉の小舌

ひまつるけはひ、咳きて「あれなるはまた

衰ふる腎臓の薬、乾肉の

陰」といひて、北海のまぼろし夢じ。

別りくじるまだ見ぬ海の靈獸

小刀の刃にぬるる妖のしたたり。

鬚の生干の色のなまぐさるに

ふとしき聞きぬ棘ゆき潮騒の音を。

つぶやきて人はも去りぬ。つむじ風

つとこそ躍れ。ほほけ立つ埃まみれに

臍肉の熱ぼる腫み——しかすがに

心はまどふ仄ぐらき不安の怯え。

日ぞ正午。——油照りする日のしづく  
 食滞るゝ底に、肉の蒸れ餓えゆく匂ひ——  
 ひだるさに何とは知らず脂くさき  
 吹吐のまきれ、辻賣はつぶやくけはひ。

### 記念動物園

亡くなつた梁川君は、相撲と、動物園と、俵で其邊を逍遙くのと、この三つが自分の道楽だといつてゐる。私も動物園は好きだ。明治の京都人にどこといつて感服した事はないが、何かの御慶事の記念だといつて岡崎に動物園を拵らへただけは實際氣に入つた。

今日も動物園へ往つてみた。そろ／＼木の葉が落ちかゝつたり、日光が黄ろくなり

かゝつたりすると、何だか急に渡り鳥の事が思ひ出されるので、慙うして小鳥の檻でも覗いてみやうといふのだ。

小鳥といふとつい思ひ出す事がある。あの羅西亞の作家アントン、チエホフの書いた THE REID といふ短篇を讀むと、樺の木で、老年の疥せこけた牧人が、雨濕のした幹に凭れて、手製の牧笛を吹いてゐるのがある。吹くといつても、調子にも合はない手前勝手、懶い、氣のめいりさうな節で、何やら屈托さうな物思ひに沈みながら、想ひ出したやうに時折唇にあてては低く吹き鳴らしてゐる。で、どうかして不圖そこを通り合はせた獵の男などを捉へては、自分は四十年來毎日のやうにじつと神様の仕事をみてゐるが、どうも段々と悪くなつてゆくばかりで、往時は其邊の野原で鶴だの、蒼鷺だの、鶴だの、小鴨だのと大層な禽の群がゐたものだが、今は滅多にその影さへ見られぬ、神の世界はどうやら漸次に破滅に傾いてゆくものらしいといつたやうな事を、しんみりした調子で吐くやうに説きたてる……

私は思ふ、これは強ち老人の愚痴ばかりでは無いらしい。私達の國でも、鳥の事などに多少氣をつけてゐるものは、近頃になつてめつきり渡鳥の數の減つた事に思ひ當るに相違ない。私の母などの談話によると、恰ど御維新そここの、母がまだ十二三の頃には、其邊の田圃へ摘艸に出かけてみると、よくお伽噺の國から出て來る老人のやうに、灰色の背をした眞名鶴が、稻束か何かの蔭からひよつくりと出て來る、そして子供連ばかりだと見ると、馬鹿にしたやうな顔付で、のそりのそりと大跨に歩いて來たものださうだ。が、既う私達の産れた頃には、そんな鳥は悉皆見られなくなつてゐた。

私達が七つ八つの頃には、徐々秋が更けて來ると、晴れきつた空を、毎日のやうに鴈が渡つた。私達はそれを見かけると、吹きさらしの野路に立つて、空の一方を振り仰ぎながら

『鴈よ棹になれ』

棹になつたら鍵になれ』

と、その長い行列が漸次に雲のなかに鈍染み込むでしまふ迄、聲を洒らして叫むたものだ。……が、いつの間にか鴈も少くなつて、今では晝間その長い列が空を渡るといったやうな事は、よくよく人氣の遠い野原か何處かでないと滅多に見られなくなつた。

その頃はまた後の岡に往つてみると、葉の落ちかゝつた雑木林に、渡鳥がどつさり來てゐたものだ。渡鳥といふと、私は海を超えて來る那の小つぼけな旅人の慌たしい旅を考へて、いつも言はうやうのない寂しい旅心地を覺える……。

渡鳥の初客といつたら——さやうさ先づ鴈とでもいつておかう、秋の彼岸が過ぎて除々日影が黄色がかつて來うといふ頃、私達はどうかすると暖かい日の午過ぎ、其邊の木立で疇の高い、鋭い聲を聞く事がある。

『あゝ既う秋だな』

と思はず振りかへつてみると、矮少の襟に交つて、すばぬけて背のひよろ高い楡の木に、鴈が一羽止つて、黄いろい夕日をうけて、羽莖が金のやうにきらきらしてゐるの

が見える。私達はその瞬間言はう様のない強い、健かな氣持が胸に流れるのを覚える。

鴉の次には鶴が来る。山家の晝すぎ、懶さうな蟋蟀の聲もいつの間にか鳴き止むで枯葉ひとつ寝返りを打つ音までが、明瞭と耳に入る静さの底に、どこやら戀窆れのした溜息とでもいつたやうな、微かな聲が洩れて来て、何の音とも判らない。すると樹蔭の韭島か何處で、餘念もなくせつせと仕事に精を出してゐた農夫が、ひよいと顔をあげる拍子に、すぐ鼻先の小枝から枯葉のやうな小鳥が、ついと身を逸らして逃げて往つてしまふ——それが鶴だ。

鶴といつたら、恰で悲哀でも抱いてる人のやうに、大抵は連にはぐれて唯一人で出て来る。そして其邊の小枝に止まるなり、何か眼に見えぬ昔馴染をでも招くやうに、ひよくりひよくりと軽にお辭儀をして、啜くやうな聲で唄ひ出す。私はそれを見ると、他の爲、世の中の爲といつたやうな理由でなく、自分一人のために歌つて、それで満足してゐる人達を思ひ出さずには居られない。

鶴が来てものゝ十日も経たぬ間に、また四十雀が来る。この鳥は鶴と違つて十羽も二十羽も群を組んで来る。山から里へ移る折などには、恰で時雨でもするやうに、細かい羽音がさつと空を掠めて聞える。そして其邊の木立におろすなり、眩しい程微捷く、蝶や雀の翅を啄つきまはしながら、鼠色の背を反し、柔味のある胸の圓みを見せて、透き徹つた銀の鈴を振るやうな聲で、早口に喋舌くりつづける。で、恚うした大層な群のなかには、屹度まだ羽の伸びきらない、灰色の生毛をのまゝの雛兒が交つてゐて、どうかすると高い枝に止まり損つて、翻筋斗うつて宙にかへる事もあるが、そこはまた馴れたもので、いきなりひよいと下枝に捉つて、ませた身態で樹肌の罅を啄ついたりする。まるで山家育ちの、敏捷い、ささくな魂そのものを見るやうな氣持だ。

小雪がちらつく頃になると、鶴鶴が来る。これは鶴と同じやうに大抵獨り法師で、



それもこつそりと附近を忍ぶやうにして来る。冬初めの午過ぎ、山近い田舎の小家で爺は炬燵に潜り込むで、こくりこくりと轉寝をする、その側で婆さんはせつせと糸車を繰つてゐる、煤けた障子に擔に吊した干菜の影が見窄らしく映つて、時をり小ばけな小鳥の影がちらついたりする、どうかして糸目が切れて、睡さうな鐘の音がばつたり止むと、こそくくと掛菜を揚る音がする。が、老人の耳にそんな音の聞き取れやうが無い。婆さんは俯向いた儘、また糸を紡ぎにかゝる……さうかうする間に、鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、ひよいひよいと小刻みに芭を傳つて、隣から隣へと狹隘しい物陰を出たり入つたりして移つてゆくのだ。

渡鳥の往來といふ事に、餘程興味を有つた人でないと、どうかすると憚うした鳥の消息は、つい氣が付かずに一冬を過してしまふ事がある。

鶴鶴と後先になつて頬白が来る。(私達の郷里では亥子になると、いつも頬白が来ると言ひ傳へてゐる) 冷たい雨のびしよびしよと降るなかを、獨り者の頬白が、灰色の胸までぐしよ濡れになつて、蕭然と其邊の木に止つてゐるのを見ると、私の國でこの

鳥の鳴聲を解いて、

「一筆啓上つかまつる

子供泣かすな火の用心

今度の便に金十兩

やりたいけれど一文も御座なく候

と言ひ傳へられるのを思ひ出して、涙々と世渡りの難しさと、旅心の寂しさを思はぬ譯にはゆかない。

後の雑木林に這處小鳥が来る頃になると、野らには既う徐々鶉が來、鶉が來てゐる

……  
 後の雑木林に這處小鳥が来る頃になると、野らには既う徐々鶉が來、鶉が來てゐる

憚ういつた風に、私達の幼い頃には、秋の中頃から春先にかけては、次から次へ渡鳥の群が遣つて來たものだ。が、その後鳥撃といふ事が素人にも黒人にも行はれて、

段々その道の巧者も殖えて来るやうになつたり、その他種々な理由からして、鳥は滅切滅つてしまつた。で、今では私達のやうな小鳥好きもまあかうして動物園へでもやつてきて、金網につかまりながら、羽のちぎれた、尻尾のぬけかゝつた、見すばらしい小鳥を見て、それでどうなりかうなり辛抱しなければならなくなつたのだ。

那のチユホフの短篇の主人公は、憊うした状態に陥つて往くのは、唯鳥ばかりではない、獸も、家畜も、蜂も、魚も、水も、林も、また人間にしてからが然うで、神の世界の破滅は孰れ既う遠くはあるまいと言つて、深い溜息を吐いてゐる。私には斯の牧人ほどの絶望も想像力も無いが、とにかく鳥といはず獸といはず『創造』の作へた種々な物象は、それ自らの有つた方の爲めに、われとわが生命を食へ盡してしまふものらしい。で、とどの終りは痛ましい『荒廢』で、その次は『荒廢』自らが創造する新世界が現はれて来るに相違ない。——私達は然うは信じながらも、今段々と亡くなつてゆく那の小ぼけな鶴鶴や翁の運命を思ふと、次ぎに廻つて来る新しい世界の全價值を賭けてまで、矢張あの些細なもの、生命を惜しがらない譯にゆかない。

### 西堀川のうつちやり拾ひ

日は水無月の正午さがり、

油日照の日の酔は

呻吟びぬ、空に。瘁えしるる

薨は眩ひ、搏風は瘵え

たゆげの喘ぎへとへとに、

都府の街は息づきぬ。

日は正午さがり、溝尻の

水はすゑばみ、氣ぬるみて

沈澱みぬ。崩えし水際の

水澁にひたる塵芥捨場  
 ひねもす懈に欠味する  
 いざれの臭さ。——襦袢なる  
 乞食の煙は、しなびつる  
 乳もあらはにて、乾かわきし  
 橋桁に凭り居ねむりぬ。

日は正午さがり、なまぬまの  
 水中にひとり立ち溜るる  
 うつちやり拾ひ、垢じめる  
 日黒みの肝汗ばみて  
 目無し籠をわきばさみ、  
 つと足立ちを水口の

底のぬかりに試みて、  
 やをら洗ぬぬ。あひふつと  
 水はつみやき、糞膠みて  
 水粒を病みぬ。水がくねの  
 底には、物のあはれをこそ、  
 空々とも知らぬ「密」の言。  
 胸撫めて横らさるる  
 尾の爪さきは、耳をたて  
 淫に洗ぬるくらやみの  
 臭さを聞きぬ、あゝあゝあゝ、  
 ばたばたの音を聞きとらぬ。

水陰に見えぬ束の間に、

足はけながき夢を見て、  
 やがて掻げぬ、目なし籠。  
 水は離みて、水がねの  
 したたりの如。水の面には、  
 ふとほくそ笑ただよひて  
 頬肉のゆるび仄じろに、  
 皺みぬ。やをら手だゆげに、  
 籠をしも洵れば、ひたひたと  
 浪はたるみつ。さゝ濁り  
 水こそ鈍ばめ。——籠には  
 潮じめる藻の葉がくれに、  
 水泥にぬる、「忘却」の  
 物の端かな。——撰りこのむ

金盞の匙、古渡りの  
 壺の片われ、(夢に見し  
 代をしぞおもふ) 焼き類れ、  
 煙管の金具、潤み朱の  
 塗の折櫛(ふと、髪)  
 かかりの匂ひ(錢の縁面、  
 陶の罍皿、——葬られの  
 今はた世にもよみがへり、  
 息づくけはひ。垢染める  
 うつちやり拾ひ、物の價値は  
 吾からめきし撰りきらひ、  
 ふと蟻の貝とりそへて、  
 肩そびやきぬ。然は天の

價ぶみに吾を言ひ張れる  
 誇りのみ。その束の間を  
 まみこそ匂へ。——撰り屑は  
 こぼれぬ、やがて底着きて、  
 をぐらき淫の胎の府に  
 夢かみむ。——日は正午さがり  
 汗じみ痒ゆき裸身の  
 肉のたるみや、生濕める  
 潮のいされに、ふと市の  
 女が肌の香を嗅ぎて、  
 嫉げのさまにほゝ笑みぬ。

## 京の歌

中澤弘光

### 旅の歌二十首

美しとお白粉白き踊子の背景を近き山にして見ぬ  
 おしろいの白と青磁の眼の色と赤き襟とを愛づる人かな  
 櫻狩かへれば人と踊見に四條をわたる京の春かな  
 京の子が扇かざして透綾さる夏も間近き夜の灯の色  
 棠の花の霞む末なる島原や傾城見えて柳の青さ  
 仁和寺の塔を見るとき嵯峨山の寺の鐘鳴る鐘に花散る  
 モデル見に友と祇園をさまよひし春の日に似たる細き雨かな

布晒す人等に空の白雲と山とを映す加茂の川水  
 大原や比良の嶺しろき若狭道雪に尋ぬる寺は何處ぞ  
 みとばりを引けば壽永の美しき女院の御像みあかしに照る  
 築土垣清水めぐらし大原へ鞍馬へ三里上加茂の村  
 京の山朝霞深く赤き日の圓きを仰ぐ五條橋かな  
 みあかしの前に女院のおん像を描けば小暗く山暮れてゆく  
 紫の繪筆洗ひてその水の行方を見れば月ぞ流るる  
 清水の舞臺と小さき彩色の塔の中なる花の茶屋かな  
 曳船を橋の柳によりて見る旅人に人の京ことばかな  
 欄干に遠き鼓をきゝてゐぬ柳こほるゝ川端の家  
 塔二つ山見え初めぬ冬のもや霽れゆくけふのこのあさいして  
 舞子等と橋見る人の横顔に強くさす日の黄なる色かな  
 なき人のおちばを持ちてこし妹と相逢ふけふの夕時雨かな

畿内見物京都の巻 大尾













製	表	活	寫	原	玻	印	木
	紙		真	色	璜		
本	刷	版	版	版	版	刷	版
植	五	三	同	大	中	四	伊
木	彩	生		江	野	村	上
澗					米	熊	几
藏	閣	舍		太	藏	吉	骨

明治四十四年二月廿五日印刷  
明治四十四年三月一日發行

著作權  
所有

發兌元

關東發賣元  
關西發賣元

東京市日本橋區上槇町  
大阪市東區北波邊町

千代田書房  
杉本梁江堂

東京市麴町區平河町五丁目五番地

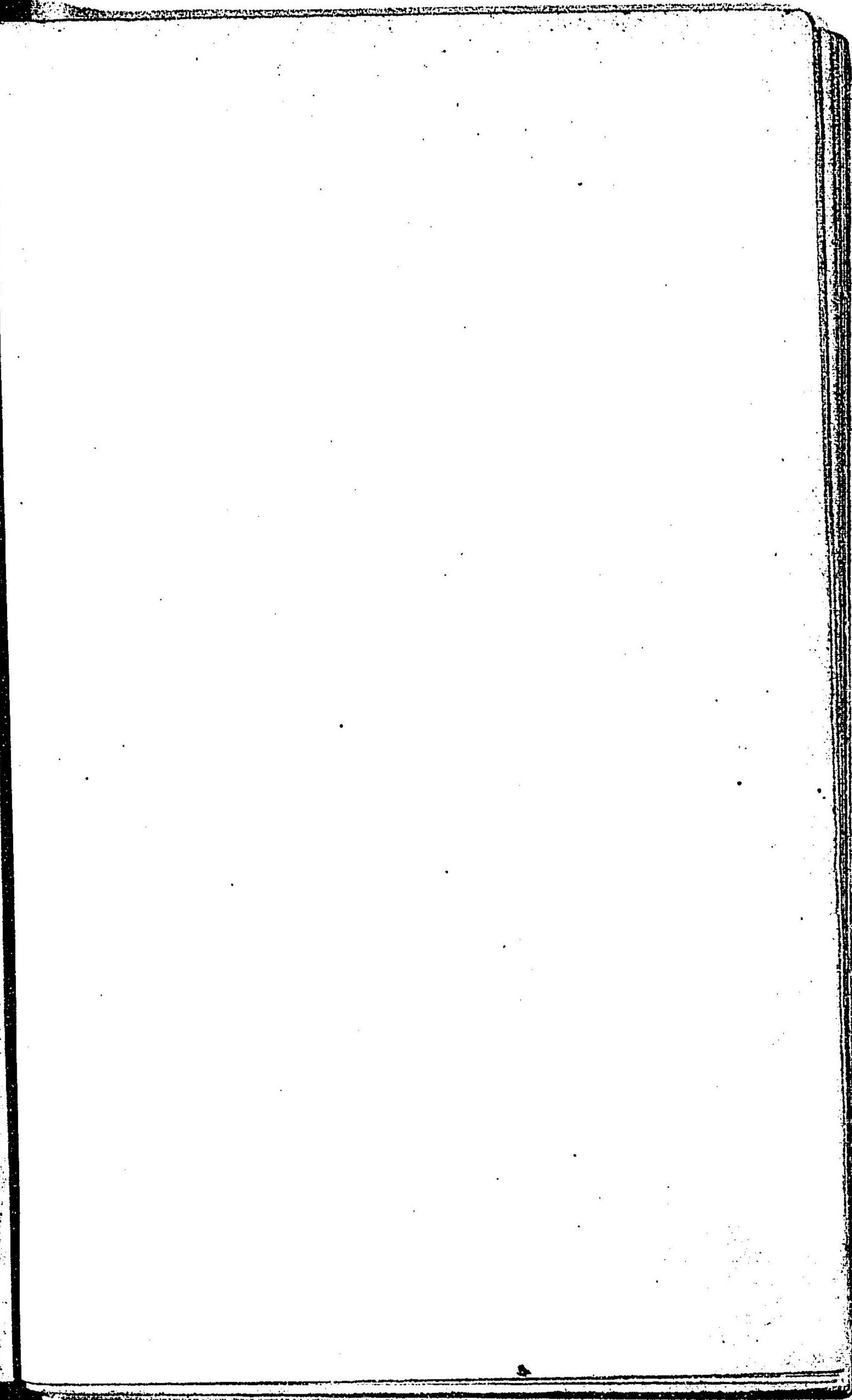
金尾文淵堂  
(振替 東京三八一七番)

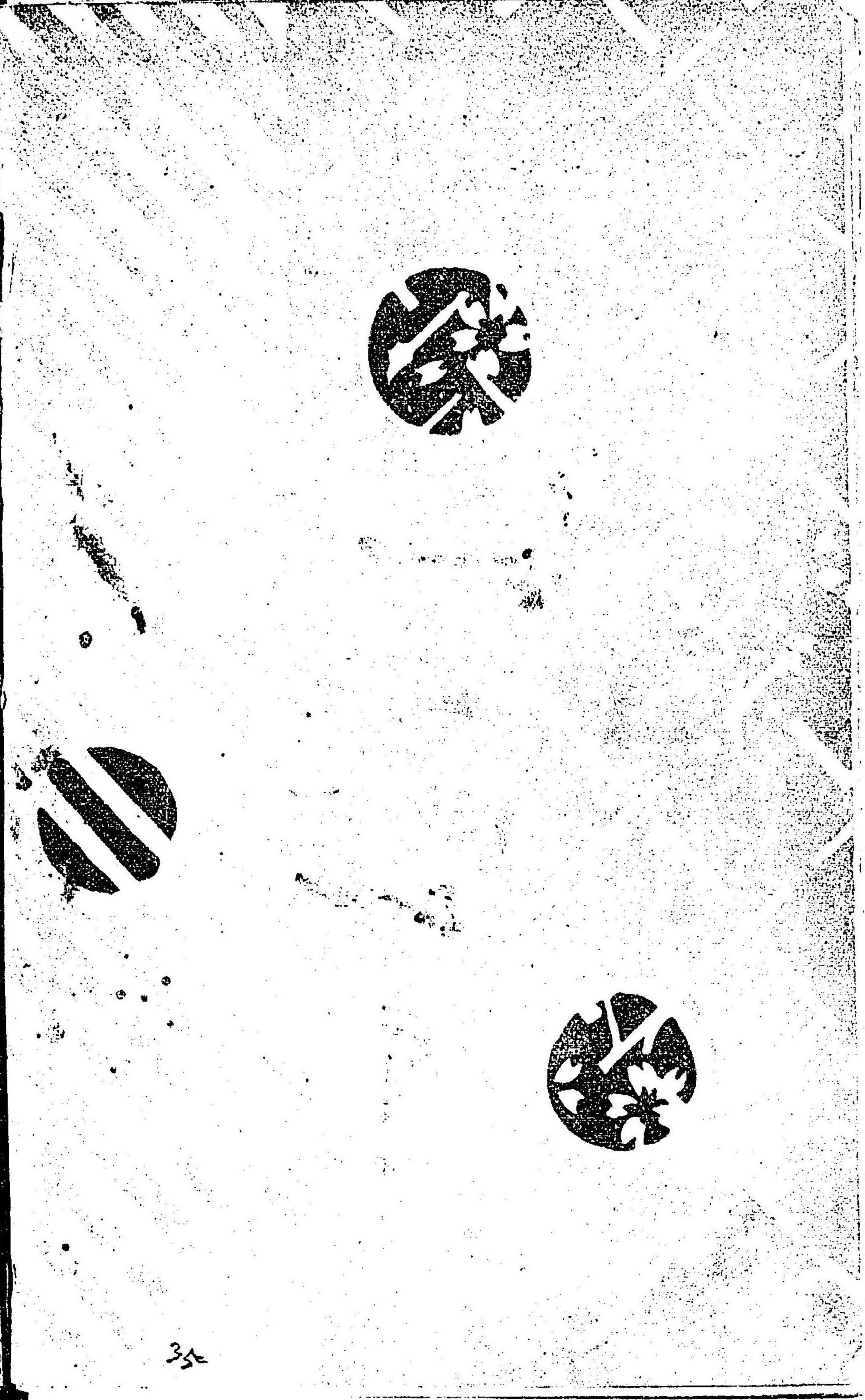
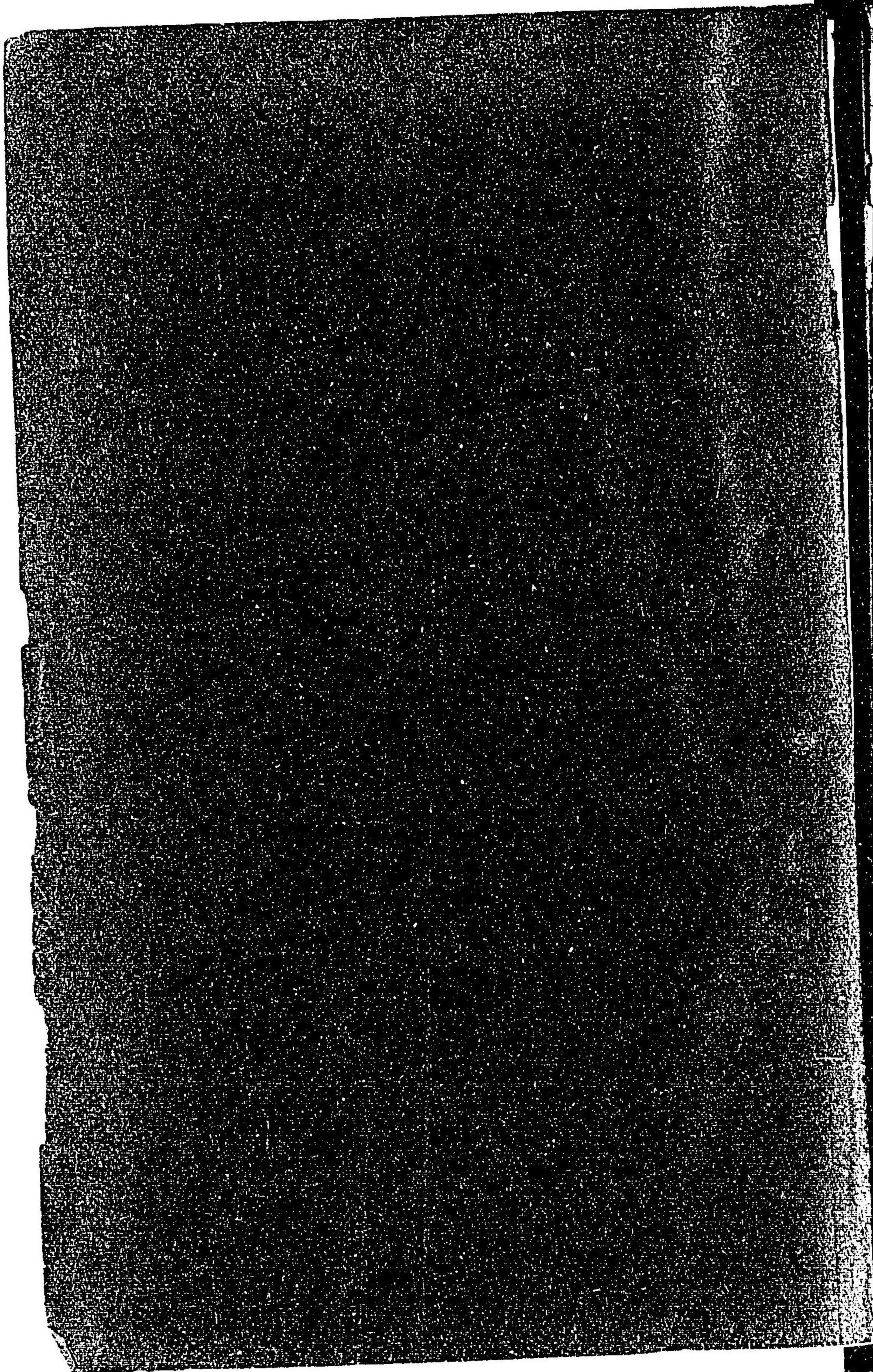
金尾文淵堂

編輯者兼  
發行所  
東京市麴町區平河町五丁目五番地  
金尾種次郎

印刷者  
東京市麴町區平河町一丁目四番地  
中村彌三郎

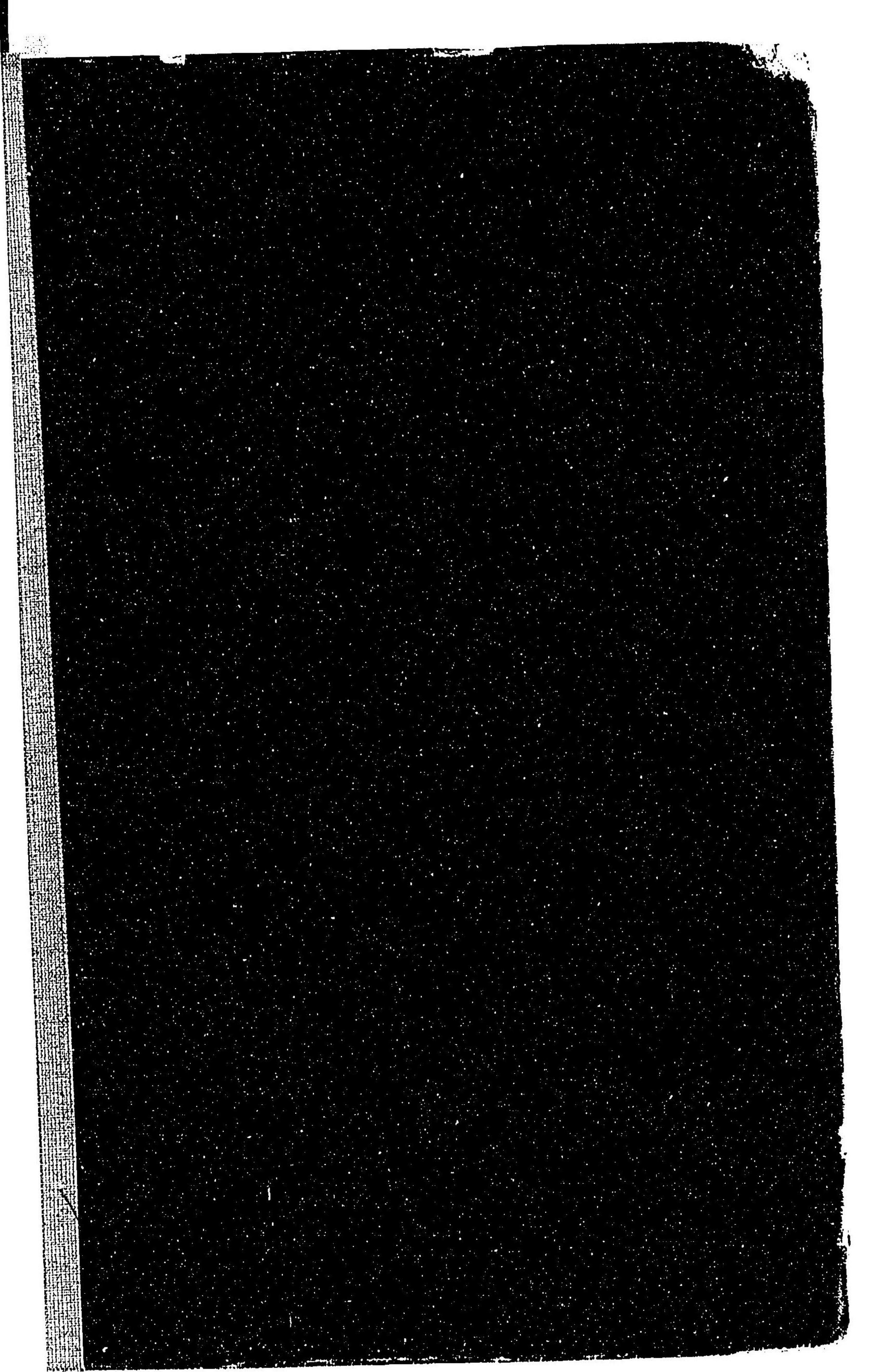
印刷所  
東京市麴町區平河町一丁目四番地  
三井生舍





35e

330  
217





330

27

025304-001-8

330-27

畿内見物

高安 月郊, 他 / 著

1冊

M44-45

ADC-2730



